

神納塚古墳発掘調査報告書・ 広沢山遺跡発掘調査報告書

2022

加古川市教育委員会

神納塚古墳発掘調査報告書・ 広沢山遺跡発掘調査報告書

2022

加古川市教育委員会



写真 1 遺跡上空から西条方面を望む（南西から）

卷頭図版 2



写真2 調査区全景（写真下が南西） *合成写真



写真3 神納塚古墳（南西から）



写真4 神納塚古墳 遺物出土状況（南から）

卷頭図版 4

神納塚古墳



写真5 神納塚古墳 棚出（北東から）



写真6 神納塚古墳 遺物出土状況（北東から）



写真7 神納塚古墳 土層(D-D') (西から)



写真8 神納塚古墳 A区遺物 (南から)



写真9 神納塚古墳 D区遺物 (南から)



写真10 神納塚古墳 調査後の周濠平面表示



写真11 神納塚古墳 調査後の説明板設置

卷頭図版 6



写真 12 神納塚古墳出土 円筒埴輪



写真 13 神納塚古墳出土 形象埴輪



写真 14 広沢山遺跡 土坑 1 (南から)



写真 15 広沢山遺跡 土坑 1 出土遺物



写真16 広沢山遺跡 挖立柱建物1（写真下が北東）



写真17 広沢山遺跡 溝1（南西から）

序　　文

加古川市は、播磨平野の東部を流れる一級河川加古川の恵みにより、古くから人々が暮らす豊かな場所です。発掘調査を行うと、その確かな軌跡が地中から姿を現します。

このたび完成した本書は、加古川町大野に所在する神納塚古墳及び広沢山遺跡の発掘調査報告書です。

神納塚古墳は、加古川市を代表する遺跡である日岡山古墳群に含まれ、今回の発掘調査が日岡山古墳群で行われた初めての本格調査となります。後述する広沢山遺跡の発掘調査中に偶然発見されたもので、日岡神社にあった古地図に見える「神納塚」と考えられるものです。残念ながら残っていたのは古墳の周濠部分のみでしたが、その周濠内から埴輪が出土するなど、日岡山古墳群をより深く理解するための貴重な成果を得ることができました。

広沢山遺跡は、平成30年度の試掘調査で発見され、古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡として登録されており、こちらも今回が初めての本格的な発掘調査となります。見つかった遺構や遺物は少量でしたが、日岡の丘陵上で活動した人々の興味深い痕跡が垣間見られました。

本書の刊行が、市民の方々にとって郷土の歴史・文化を理解する資料として、また文化財保護へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査実施及び報告書作成にあたり、多大なご協力を賜りました地元住民の方々や関係機関、関係各位に厚くお礼申しあげます。

令和4年1月

加古川市教育委員会

教育長 小南克己

例　　言

- ・本書は、兵庫県加古川市加古川町大野地内に所在する神納塚古墳及び広沢山遺跡の発掘調査報告書である。
- ・この調査は、加古川市公園緑地課が進める日岡山公園再整備事業に伴うものとして令和2年度に実施した。
- ・日岡山公園再整備事業のうち、埋蔵文化財に関する調査は加古川市教育委員会が主体となって実施し、前川建設株式会社及び安西工業株式会社の協力を得た。
- ・発掘調査は、令和2（2020）年5月12日から同年8月8日までの期間において実施した。
- ・整理作業及び報告書作成は、令和2（2020）年8月11日に開始し、令和4（2022）年1月31日の報告書刊行をもって終了した。
- ・調査期間中における調査体制は以下のとおりである。

加古川市教育委員会

教育長 小南克己

教育指導部

部 長 山本照久（令和2年度まで）、神吉直哉（令和3年度から）

次 長 杉本達之

文化財調査研究センター

所 長 沼田好博（令和2年度まで）、河村孝弘（令和3年度から）

副所長 宮本佳典

庶務担当係長 藤本庸介

主 査 高下 寛、九鬼一文（令和2年度まで）、前田正尚（令和3年度から）

学芸員 山中リュウ（調査担当）、平尾英希（調査補佐）、古林舞香（調査補佐）

埋蔵文化財専門員 岡田美穂

- ・遺物の水洗・注記・接合・復元は、加古川市会計年度任用職員 井上かおり、窪田美佳、栗原美緒、佐藤 薫、西村秀子が実施した。
- ・遺構図のトレースは、古林及び安西工業株式会社が実施した。
- ・遺物の実測及びトレースは安西工業株式会社が実施し、遺物観察表の作成は平尾が行った。
- ・本書に掲載の遺構写真は山中が撮影し、空中写真撮影は前川建設株式会社及び安西工業株式会社が実施した。遺物写真は安西工業株式会社が撮影した。遺構写真の整理は井上が行った。
- ・挿図・図版の作成は、古林、西村及び安西工業株式会社が実施した。
- ・本書の執筆・編集は山中が行った。
- ・本調査において得られた諸資料・出土遺物は、加古川市教育委員会が保管・管理している。

- ・発掘調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々や諸機関からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

池田征弘 泉 真奈 陰地祐輝 岡田 功 岡本篤志 岡本一士 奥田智子 上月昭信
上月香港 清水一文 園原悠斗 高瀬一嘉 田中幸夫 友久伸子 永井信弘 永恵陽子
中久保辰夫 中村 弘 原田昌浩 廣瀬 覚 藤原光平 古谷章子 宮下愛美 森内秀造
森下章司 森下大輔 山中良平 山原本也 山本 誠 山本祐作 和田晴吾
大手前大学史学研究所 加古川市文化財審議委員会 東播磨地域史懇話会 兵庫県教育委員会
兵庫県立考古博物館

凡　　例

- ・本文中ならびに挿図中における標高は、東京湾平均海面（T.P.）を用いた。また、遺構全体図中の座標値は、世界測地系（第V系）に基づき、作図段階で設定したものである。
- ・上記の座標を基準とし、調査区全域に5m間隔のグリッドを設定した。
- ・本書に掲載の遺構番号は、整理作業時に掲載遺構として抽出したもののみについて、遺構種別ごとに通し番号を付した（例：掘立柱建物1、溝1など）。
- ・本書中の挿図の縮尺は、遺構図は1/40を基本とし、古墳の平面は1/150、掘立柱建物跡及び溝の平面は1/80とした。遺物実測図は1/4を基本とした。なお、上記と縮尺が異なる場合は個別に明示した。
- ・遺構図における線種・線号は以下のとおりである。
調査区（実線・0.4mm）、遺構の上端（実線・0.3mm）、遺構の中端（実線・0.2mm）、
遺構の下端（実線・0.1mm）、攢乱（実線・0.1mm）、復元線・隠れ線（破線）
- ・土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帖』（2014年版）に準じた。
- ・本書に掲載の遺物実測図は、遺跡や出土した遺構にかかわらず通し番号を付している。
- ・遺物実測図中の線種は、外形線・中心線・区画線は実線、ナデによる稜線は破線で示した。また、須恵器の断面は黒塗り、それ以外の遺物の断面は白抜きで表現している。
- ・遺物観察表の計測値で用いている「*」は復元値、「>」は残存値を表す。

目 次

巻頭図版

序文

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 調査に至る経緯と経過	1
第3節 地理的環境	7
第4節 歴史的環境	7
第5節 基本層序	16
第Ⅱ章 神納塚古墳	21
第1節 概要	21
第2節 調査の成果	23
第3節 出土遺物	26
第Ⅲ章 広沢山遺跡	40
第1節 概要	40
第2節 調査の成果	40
第3節 出土遺物	47
第Ⅳ章まとめ	49
第1節 はじめに	49
第2節 神納塚古墳について	49
第3節 広沢山遺跡について	54

図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1回	遺跡の位置	2	第13回	神納塚古墳	出土遺物①	33
第2回	事業対象範囲	3	第14回	神納塚古墳	出土遺物②	34
第3回	広沢山遺跡と日岡山古墳群	4	第15回	神納塚古墳	出土遺物③	35
第4回	発掘調査の範囲	5	第16回	神納塚古墳	出土遺物④	36
第5回	調査地周辺の旧地形	8	第17回	神納塚古墳	出土遺物⑤	37
第6回	調査地周辺の地形	8	第18回	広沢山遺跡	掘立柱建物 1	41-42
第7回	周辺道路地図	10	第19回	広沢山遺跡	土坑 1	44
第8回	基本層序	17	第20回	広沢山遺跡	土坑 2	45
第9回	遺構配置図	19・20	第21回	広沢山遺跡	土坑 3	45
第10回	「永江ノートにみる日岡山古墳群分布図」	22	第22回	広沢山遺跡	溝 1	46
第11回	神納塚古墳	24・25	第23回	広沢山遺跡	土坑 1～3 出土遺物	48
第12回	神納塚古墳 遺物分布図	27・28	第24回	加古川流域の古墳編年		54

表 目 次

表1	周辺の遺跡	11	表4	広沢山遺跡遺物観察表		48
表2	神納塚古墳遺物観察表（1）	38	表5	神納塚古墳の普通円筒埴輪		50
表3	神納塚古墳遺物観察表（2）	39	表6	神納塚古墳と周辺古墳の円筒埴輪		52

図 版 目 次

写真1	遺跡上空から西条方面を望む（南西から）	卷頭図版 1	写真37	神納塚古墳 周廻断面検出（南から）		図版 8
写真2	調査区全景（写真下が南西）	卷頭図版 2	写真38	広沢山遺跡 掘立柱建物 1 檻出（北から）		図版 9
写真3	神納塚古墳（南西から）	卷頭図版 3	写真39	広沢山遺跡 掘立柱建物 1（北東から）		図版 9
写真4	神納塚古墳 遺物出土状況（南から）	卷頭図版 3	写真40	広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P1（西から）		図版 10
写真5	神納塚古墳 檻出（東北から）	卷頭図版 4	写真41	広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P1 断面（西から）		図版 10
写真6	神納塚古墳 遺物出土状況（北東から）	卷頭図版 4	写真42	広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P3（南から）		図版 10
写真7	神納塚古墳 土層（D'0'）（西から）	卷頭図版 5	写真43	広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P3 断面（南から）		図版 10
写真8	神納塚古墳 A 区遺物（南から）	卷頭図版 5	写真44	広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P6（西から）		図版 10
写真9	神納塚古墳 D 区遺物（南から）	卷頭図版 5	写真45	広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P6 断面（西から）		図版 10
写真10	神納塚古墳 調査後の周囲平面表示	卷頭図版 5	写真46	広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P7（南から）		図版 10
写真11	神納塚古墳 調査後の説明板設置	卷頭図版 5	写真47	広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P7 断面（南から）		図版 10
写真12	神納塚古墳出土 圓筒埴輪	卷頭図版 6	写真48	広沢山遺跡 土坑 1（南西から）		図版 11
写真13	神納塚古墳出土 形象埴輪	卷頭図版 6	写真49	広沢山遺跡 土坑 1 遺物出土状況（南から）		図版 11
写真14	広沢山遺跡 土坑 1（南から）	卷頭図版 7	写真50	広沢山遺跡 土坑 1 土層（A-A'）（南西から）		図版 12
写真15	広沢山遺跡 土坑 1 出土遺物	卷頭図版 7	写真51	広沢山遺跡 土坑 1 土層（B-B'）（西から）		図版 12
写真16	広沢山遺跡 掘立柱建物 1（写真下が北東）	卷頭図版 8	写真52	広沢山遺跡 土坑 2（北西から）		図版 13
写真17	広沢山遺跡 溝 1（南西から）	卷頭図版 8	写真53	広沢山遺跡 土坑 2 土層（西から）		図版 13
写真18	道路上空から日岡山公園を望む（南東から）	図版 1	写真54	広沢山遺跡 土坑 3（南から）		図版 14
写真19	神納塚古墳と日岡山公園（北東から）	図版 1	写真55	広沢山遺跡 土坑 3 土層（南西から）		図版 14
写真20	神納塚古墳（写真下が南東）	図版 2	写真56	広沢山遺跡 溝 1（西から）		図版 15
写真21	神納塚古墳（北東から）	図版 2	写真57	広沢山遺跡 溝 1 土層（B-B'）（南西から）		図版 15
写真22	神納塚古墳 檻出（南西から）	図版 3	写真58	基本層序（A-A'）（南西から）		図版 16
写真23	神納塚古墳（南西から）	図版 3	写真59	基本層序下層（A-A'）（北から）		図版 16
写真24	神納塚古墳 遺物出土状況（南西から）	図版 4	写真60	基本層序（B'-B'')（南西から）		図版 16
写真25	神納塚古墳 遺物出土状況（北東から）	図版 4	写真61	基本層序下層（B-B'')（西から）		図版 16
写真26	神納塚古墳 A 区遺物（南から）	図版 5	写真62	作業風景①		図版 16
写真27	神納塚古墳 B 区遺物（南東から）	図版 5	写真63	作業風景②		図版 16
写真28	神納塚古墳 C 区遺物（南から）	図版 5	写真64	作業風景③		図版 16
写真29	神納塚古墳 D 区遺物（南西から）	図版 6	写真65	作業風景④		図版 16
写真30	神納塚古墳 E 区遺物（北東から）	図版 6	写真66	実測遺物 1～6		図版 17
写真31	神納塚古墳 F 区遺物（南東から）	図版 6	写真67	実測遺物 7～17		図版 18
写真32	神納塚古墳 土層（A-A'）（東から）	図版 7	写真68	実測遺物 18～32		図版 19
写真33	神納塚古墳 土層（A''-A''')（東から）	図版 7	写真69	実測遺物 33～37		図版 20
写真34	神納塚古墳 土層（B-B'）（南から）	図版 7	写真70	実測遺物 38～45		図版 21
写真35	神納塚古墳 土層（C-C'）（南から）	図版 8	写真71	実測遺物 46～54		図版 22
写真36	神納塚古墳 土層（D-D'）（西から）	図版 8				

第Ⅰ章 はじめに

第1節 遺跡の位置

かいじん の づか 神納塚古墳及び広沢山遺跡は、加古川市加古川町大野地内に所在している（第1図）。

兵庫県加古川市は、播磨灘に面した県南部のほぼ中央に位置し、西側を高砂市・姫路市、北側を加西市・小野市、東側を三木市・加古郡稲美町・同郡播磨町・明石市と接している。現在、国道2号や国道250号（明姫幹線）、JR山陽本線などの主要基幹交通路が東西に横断するなど、東播磨地域の中核都市として機能している。また、市域の中央には県下最大の河川である加古川がほぼ南北に縱貫しており、おもに近世以前においては内陸部との主要な交通路や交易路として盛んに利用されていた。畿内に近く、陸路・水路・海路が縱横に交わる交通の要衝として、多くの遺跡が存在する土地である。

今回報告の遺跡が所在する加古川町は、加古川下流域の左岸に位置し、JR加古川駅や商業施設、行政施設などが集中する加古川市の中心市街地である。加古川駅前を中心に都市化が進んでいるが、町内には鶴林寺や称名寺、日岡神社などの古社寺が点在し、北部には市内で最も大きい日岡山公園が所在するほか、昔ながらの田園風景が残る場所もあり、歴史文化や自然環境を含めた一体的なまちづくりが進められている地域である。

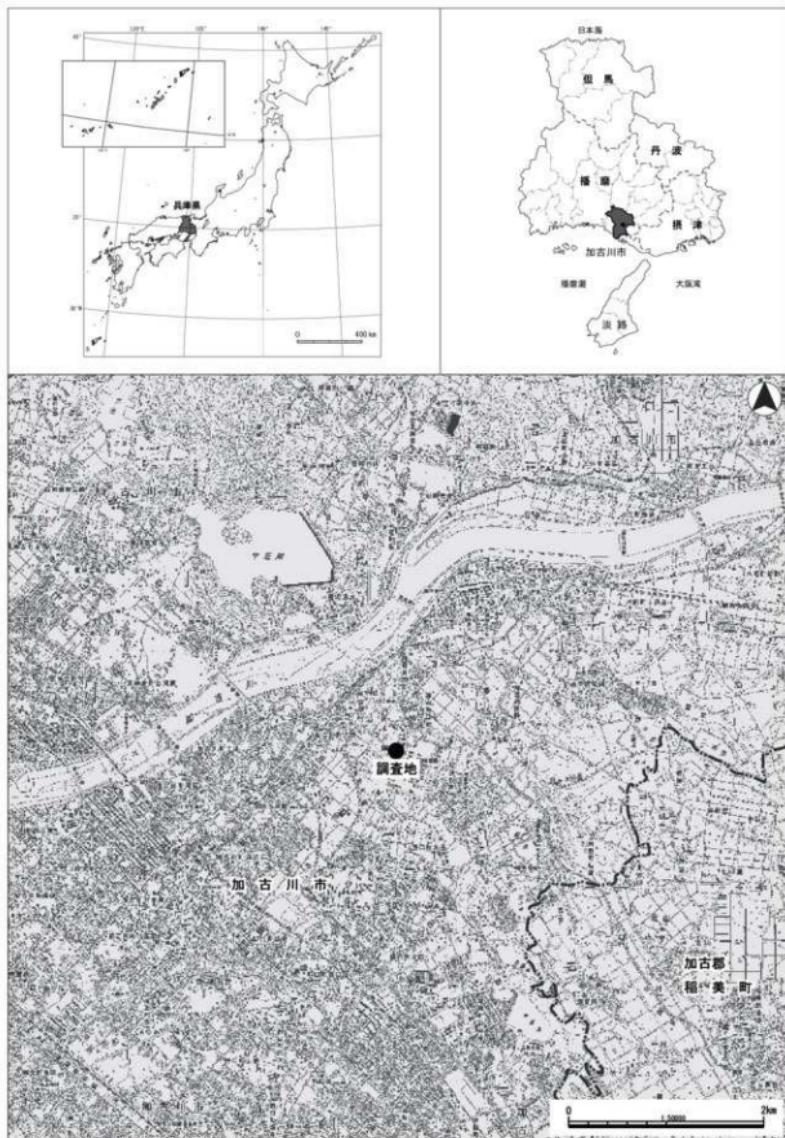
神納塚古墳及び広沢山遺跡は、上記日岡山公園の一角に所在し、加古川市が進める日岡山公園再整備事業に伴って新たに発見された遺跡である。

第2節 調査に至る経緯と経過

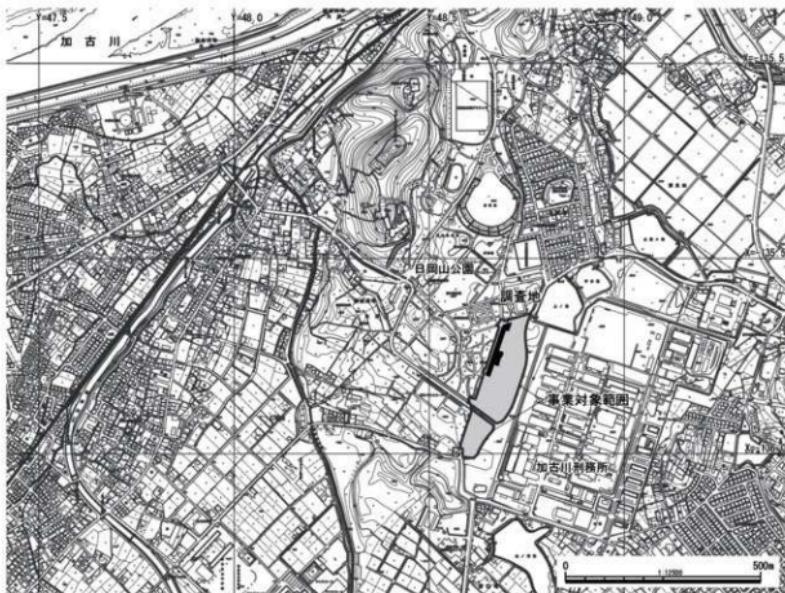
調査に至る経緯 平成28年度、加古川市は加古川町大野に所在する日岡山公園において、公園再整備事業の一環として駐車場整備工事を計画した（第2図）。

工事着手に先立ち、加古川市教育委員会（以下「市教委」という。）は、公園整備の担当課である公園緑地課から当該地における埋蔵文化財の存否確認の照会を受けた。市教委は、照会地が現在のところ文化財保護法（以下「法」という。）第93条第1項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地に該当していないことを伝えるとともに、事業対象面積が32,000m²と広く、公園内を含めた周辺には市の代表的な遺跡である「日岡山古墳群」が所在することなどから、工事着手前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の適切な把握と保護に努めることへの協力を依頼した。

その後、公園緑地課と度数にわたる協議・調整を経て、試掘調査は工事計画に合わせて平成29年度と30年度の2か年度に分けて行うこととなった。平成29年度の調査は、平成30（2018）年1月18日に事業対象地の南東側を中心に3か所の調査区を設定して行い、平成30年度の調査は、平成30年5月21日から6月4日まで、対象地の残りの範囲に15か所の調査区を設定して実施した。試掘調査の結果、事業対象地の北西側を中心とする5か所の調査区から溝や土坑などの遺構を検出し、遺物は乏しかったものの、古墳時代から平安時代頃までの集落遺跡が存在する可能性が認められた。この成果をもとに、市教委は遺構を検出した範囲を中心に「広沢山遺跡」を設定し（第3図）、7月3日付で兵庫県教育委員会（以下「県教委」という。）へ埋蔵文化財包蔵地の変更届（新規発見）を提出するとともに、公園緑地課に対し遺跡の範囲内で掘削を伴う工事を行う場合は法に基づく通知（発掘



第1図 遺跡の位置



第2図 事業対象範囲

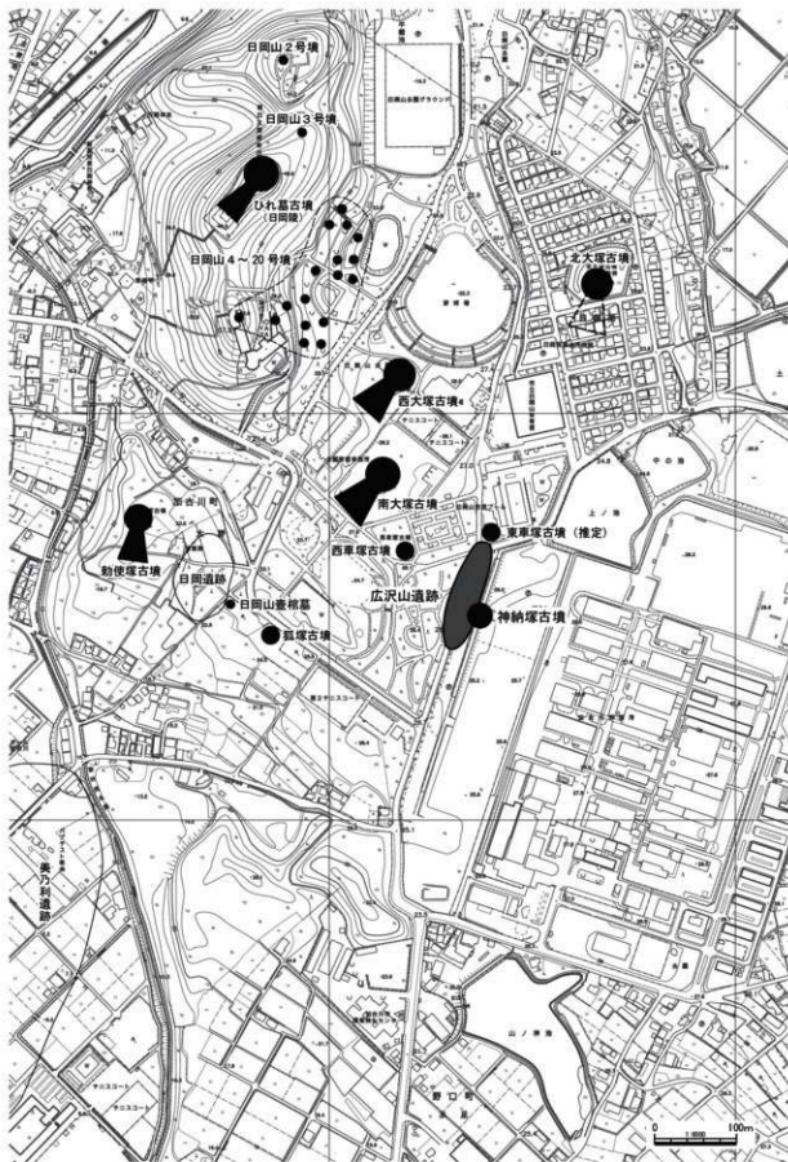
届）が必要であることを伝えた。

こうした経緯を経て、令和2（2020）年2月7日付で公園緑地課から広沢山遺跡の発掘届が提出され、2月18日付で県教委から本発掘調査を実施する必要がある旨の通知を受けた。その後、市教委は公園緑地課と協議を重ね、今回工事が大規模な切土を伴う内容であることから、工事対象地内にある遺跡範囲のほぼ全域にあたる1,789 m²について本発掘調査を実施することとなった（第4図）。

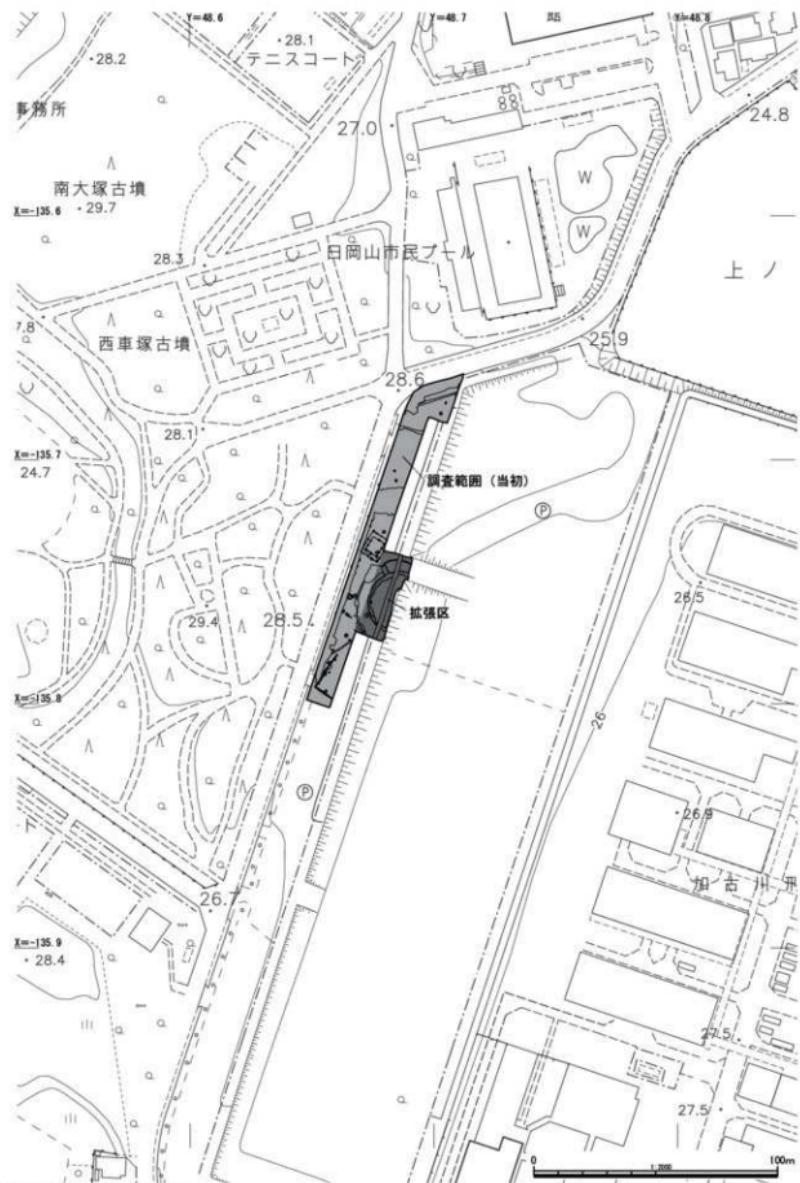
本発掘調査は、駐車場整備工事期間中の令和2（2020）年5月12日から開始した。当初、6月30日までに調査を終了し現場を工事事業者へ引き渡す予定であったが、発掘調査中にこれまで把握されていなかった古墳を発見したことで調査期間は大幅に延長することとなった。

古墳の発見は、1片の円筒埴輪口縁部の出土がきっかけであった。調査開始から間もない5月20日に調査区東壁の断面清掃中に出土したもので、近代以降の機械系油が混じる擾乱の底面付近からの出土であったため、当初は近隣の古墳からの混入品と判断していた。しかし数日後、擾乱土が堆積する窪地が古墳の周濠である可能性を考え、6月2日に調査区外にあたる東側の崖面を詳細に観察したところ、崖面に2か所の浅い皿状の溝断面を検出した。この溝断面に埴輪片が残されていることを確認したことから、この溝が調査区外の崖面から調査区方面へ向けて半円状に廻る古墳の周濠であることがほぼ確実となり、6月4日に公園緑地課及び工事事業者と緊急の協議を行い、急遽調査区の一部を東側崖面まで拡張して古墳の調査を追加で行うことが決まった。これにより、全体の調査面積は1,930 m²となり、発掘調査は8月8日まで続くこととなった。

また、調査終了後の9月23日には、県教委へ本発掘調査の終了報告を提出し、併せて新規発見の古墳について「神納塚古墳」として埋蔵文化財包蔵地の変更届（新規発見）を提出した。



第3図 広沢山遺跡と日岡山古墳群



第4図 発掘調査の範囲

調査の経過

令和2（2020）年

5月12日：南北方向に延びる幅約10m、長さ約140mの調査区を設定し、南端部から表土掘削開始（第9図）。近代以降のレンガ枠や機械系油を含む擾乱が多い。

5月14日：北側27m付近まで表土掘削（グリッドVライン付近）。調査区西側沿いは調査前まで花壇が築かれていたため擾乱が著しい。

5月20日：北側82m付近まで表土掘削（グリッドLライン付近）。ピットを複数検出（掘立柱建物1）。調査区壁面清掃中に円筒埴輪の口縁部片出土。

5月21日：北側90m付近まで表土掘削（グリッドJライン付近）。調査区を横断する大規模な擾乱を確認。

5月28日：表土掘削終了。

5月29日：調査区北側から遺構検出作業開始。

6月2日：遺構検出作業と並行して埴輪口縁部片が出土した辺りを精査。調査区外の崖面で古墳の周濠と考えられる溝の断面を確認。

6月3日：遺構検出状況の全景写真撮影を実施。

6月4日：調査区南側から遺構精査開始。随時、遺構の図化作業・写真撮影を実施。各遺構とも遺物は乏しい。

公園緑地課及び工事事業者と協議し、古墳推定範囲について調査区を拡張して記録保存のための調査を実施することを決定。同時に、工事計画に配慮して調査区北側部分（グリッドLライン以北）を先行して終了させ、工事事業者へ現場を引き渡すことを決定。

6月5日：前日の決定を受け、調査区北側に移動して遺構精査開始。半蔵後に擾乱と判明する遺構が多い。古墳推定範囲の調査区拡張準備。

6月6日：調査区北側の東壁面基本層序を図化・写真にて記録。

6月9日：調査区北側の遺構平面図作成開始（CUBIC社製測量用ソフト「遺構くん」使用）。

6月10日：調査区南寄りの土坑から土師器高杯や壺が複数個体出土（土坑1）。

古墳範囲拡張区の表土掘削開始。周濠を切っている擾乱から埴輪片複数出土。墳丘や埋葬施設は削平のためすでに失われていることを確認。

6月15日：調査区北側の遺構調査終了。東壁面にて下層確認のための深掘り実施。

6月22日：調査区北側の全体清掃開始。

6月23日：調査区北側の全景写真撮影及び空中写真撮影を実施。工事事業者へ現場引渡し。

公園緑地課及び工事事業者と協議。古墳周辺を除いた調査区南側（グリッドWライン以南）についても調査終了次第現場を引き渡すことを決定。

6月25日：古墳周濠の検出状況写真撮影を実施。

6月26日：調査区南側で検出していた東西方向に延びる溝状遺構が、ほぼ直角に曲がり北側へ続いていることが判明（溝1）。

6月29日：古墳周濠をA区～F区の6区画に分割し、A区から精査開始。

7月1日：古墳周濠の底面付近から埴輪片出土。随時、図化・写真にて記録。

7月16日：調査区南側の遺構調査終了。東壁面基本層序を図化・写真記録開始。

7月21日：公園緑地課及び工事事業者と、調査後の古墳の取扱いについて協議。現地保存は不可能なため、工事後の地表面に調査を実施した周濠範囲を明示し、付近に説明板を設置

する方針となる。

- 7月 22日：調査区南側の東壁面にて下層確認のための深掘り実施。
- 7月 27日：調査区南側の調査終了、全体清掃開始。
- 7月 28日：調査区南側の全景写真撮影及び空中写真撮影を実施。工事事業者へ現場引渡し。
- 8月 3日：古墳周濠の遺物出土状況写真撮影を実施。
- 8月 4日：古墳周濠の遺物取り上げ開始。全体清掃開始。
- 8月 7日：古墳周濠の全景写真撮影を実施。発掘機材等片づけ開始。
- 8月 8日：古墳周濠及び周辺の空中写真撮影を実施。

調査完了。

第3節 地理的環境

神納塚古墳及び広沢山遺跡は、加古川市加古川町大野に所在する日岡山公園の東南端付近に位置している。日岡山公園は、標高約 60 m を測る日岡山の丘陵一帯に 35.8ha の敷地面積を持つ総合公園で、園内とその周辺には 5 基の前方後円墳を中心とした日岡山古墳群をはじめ、複数の遺跡が分布している（第3図）。日岡山の北側には加古川が流れ、南西側には加古川の最下流域に形成された沖積低地（氾濫原）が広がり、東側には「いなみの台地」と呼称される広大な段丘地形が続いている（第5・6図）。

日岡山は、この付近一帯の地層の基底をなす流紋岩質凝灰岩が隆起した丘陵で、加古川西岸に広がる山地・丘陵地帯の末端にあたる。加古川は、日岡山とその北西側にある升田山の間を南へ流下し、硬質な岩盤地帯を過ぎた最下流域では、かつては幾筋もの流路に分かれて広範囲にわたる沖積低地を形成しながら播磨灘に注いでいた。いなみの台地は、六甲山塊によって形成された隆起扇状地で、神戸市西区神出町に所在する雌岡山付近を頂点とし、西の加古川から東の明石川にかけて続く、河成・海成からなる広大な段丘である。この地域では、前述の流紋岩質の岩盤が地下深くに沈降しており、その上部に神戸層群が堆積し、さらにその上に段丘の基盤となる大阪層群が厚く堆積している。

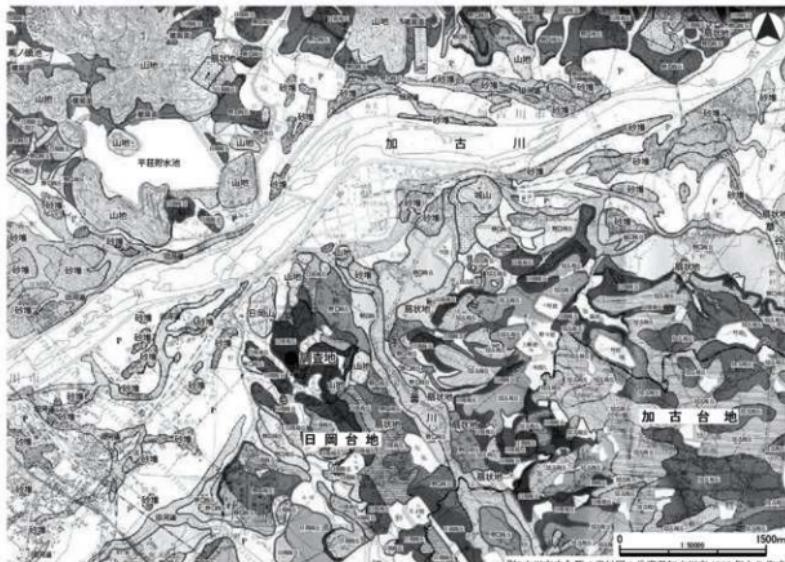
今回調査地は、いなみの台地の西端に位置しており、『加古川市史』第1巻においてミンデルーリス間水期に対応する海進期に形成されたものとされる「日岡段丘」上に立地している（田中 1989）。北東に日岡山があり、東側には加古川の支流である曇川によって形成された谷が台地の奥まで入り込んでいる。調査地周辺は、発掘調査に着手する前までは日岡山公園の駐車場として利用されてきた土地で、調査時点における地表面の標高は約 29 m である。

第4節 歴史的環境

加古川下流域は、河川や海上交通のほか、山陽道に代表される陸上交通の要衝でもあり、多くの遺跡が密集している場所である。加古川市内には、旧石器時代から中世にかけてその時に特徴的な遺跡が残されている。以下に、今回調査地とその周辺について、時代ごとに変化する遺跡の様相を概観し、当該地における歴史的環境について述べる。

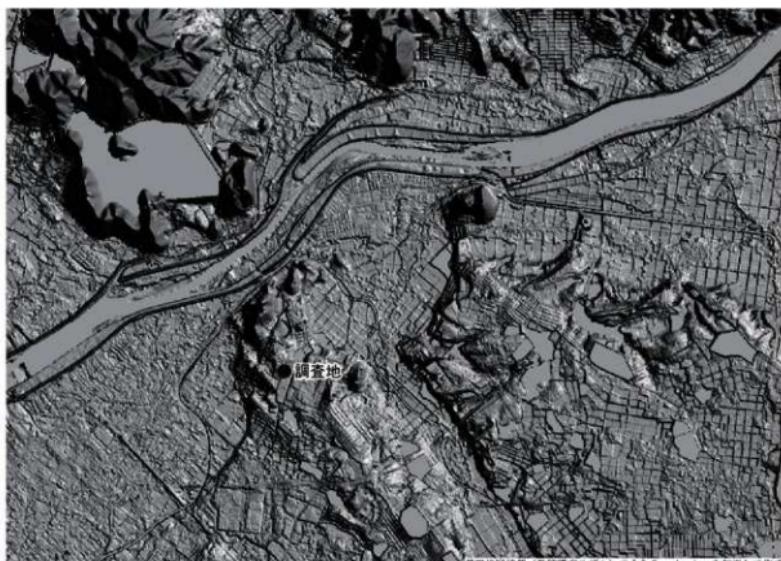
旧石器時代・縄文時代 旧石器時代・縄文時代の遺跡は、それ以後の時代に比べて調査例や発見例が少ない。また、石器や縄文土器など遺物のみが確認されている場合がほとんどである。

旧石器時代の遺跡としては、今回調査地の北西にあたる日岡山の南斜面に日岡山遺跡（第7図4、



『加古川市史』第4巻付図1 丘陵帯加古川市 1996年より作成

第5図 調査地周辺の旧地形



基礎地図情報（数値標高モデル）のうち5mメッシュを加工して作成

第6図 調査地周辺の地形

以下括弧内の番号は第7図及び表1に対応)がある。過去に地表面から石器数点が採取されており、そのうち1点は兵庫県下では珍しい黒曜石製の細石刃核と報告されている(松本ほか1982)。また、東側の曇川を挟んだ対岸には、日岡山と同じく流紋岩質の岩盤が隆起した城山(標高約85m)があり、その南斜面には神野城山遺跡(2)が散布地として登録されている。ほかに、今回調査地の南西側2kmのいなみの台地末端の低位段丘上に所在する坂元遺跡(634)では、遺構外遺物として石器製品や剥片(フレーク)の出土例があり、平岡町山之上に所在する山之上遺跡やそれに隣接する加古郡播磨町域にある大中遺跡では、合計700点を超える石器類が採集されている。また、加古川を越えた市域北西の丘陵地帯においても、親音堂遺跡(484)や西山遺跡(平荘町西山)をはじめ多くの散布地が確認されている。これらの遺跡は、これまで原位置を留めた状態での石器出土例は報告されていないものの、いくつかの遺跡では石器製品だけでなく剥片や碎片(チップ)が採集されていることから、地中にユニットやブロックを形成するような文化層が残されている可能性も考えられる。

縄文時代の遺跡としては、前述の坂元遺跡において晩期の埋甕土坑が複数調査されている。これらの土坑は墓と考えられており、付近に集落の居住域が存在する可能性がある(渡辺2009)。また、坂元遺跡の西側に広がる沖積低地に所在する溝之口遺跡(10)からは、古墳時代の溝に混入した状態で晩期の土器片が出土している。

今回調査地の東方面では、台地から舌状に突出した丘陵先端に宮山遺跡(5)がある。後期の竪穴建物跡や集石遺構が検出されたとして、隣接する古墳群とともに市の指定文化財となっているが、具体的な調査内容の情報は少ない(上田1983、松下1984)。また、城山の南西に広がる低位段丘上には西条遺跡(485、旧神野遺跡)があり、縄文時代から平安時代までの集落跡として登録されているが、縄文時代についての具体的な内容は不明である⁽²¹⁾。加古川右岸側では、沖積地にある砂部遺跡(9)、その北西側の段丘上にある岸遺跡(西神吉町岸)などにおいて、遺物包含層中から晩期の土器が多数出土しており、付近に集落が存在する可能性が高い。

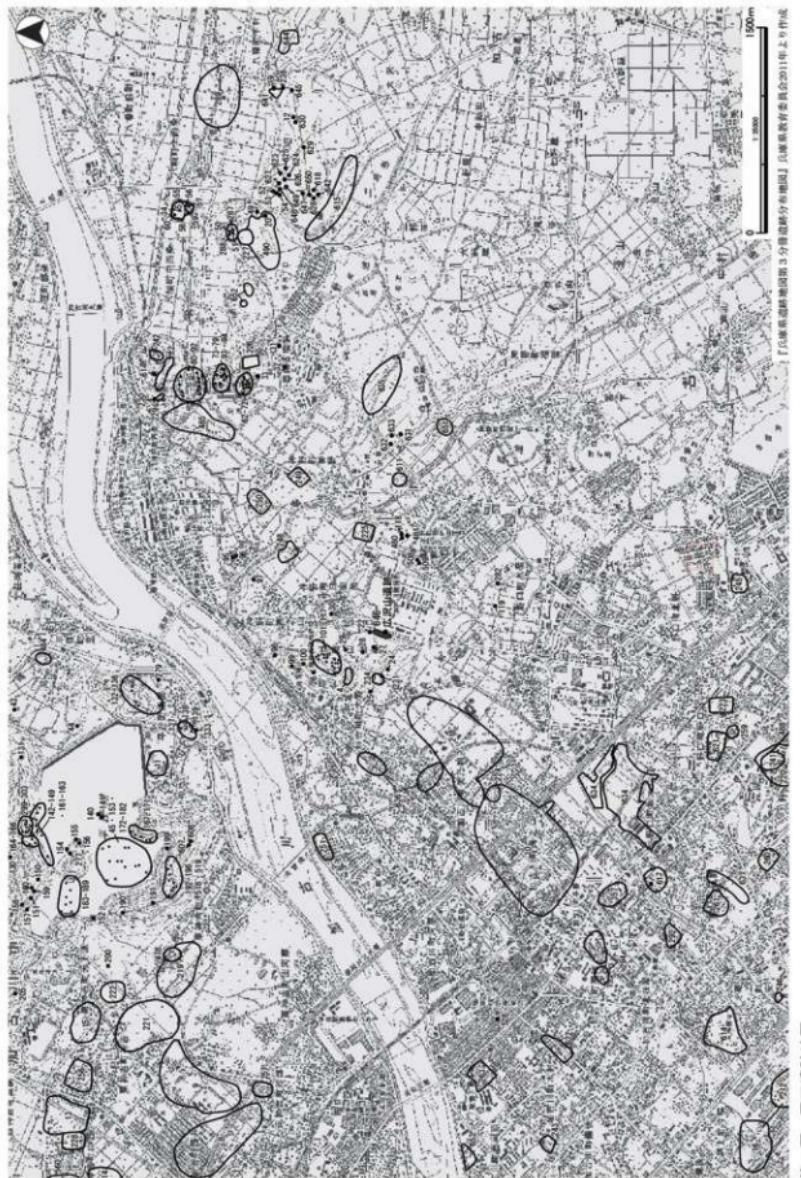
今回調査した広沢山遺跡(646)では、土坑3から縄文時代のものと考えられる石鏃が1点出土している(第III章参照)。

弥生時代 弥生時代になると市域全体で遺跡の数が大幅に増加する。

前期の遺跡としては、今回調査地の南西1kmに美乃利遺跡(218)がある。加古川左岸の沖積低地に形成された自然堤防上に立地しており、溝や土坑とともに広範囲に広がる水田跡が調査されている。また、その南側の低位段丘上にある坂元遺跡では、埋没流路から少量の土器が出土している。

その他の市域の前期遺跡では、加古川右岸側の沖積地において充実した調査成果が得られている。東神吉町に所在する砂部遺跡と東神吉遺跡(8)は、現在の加古川右岸の沖積地上に隣り合って所在する集落遺跡である。両者を同一の集落と考える見方もあり、前期における拠点的な集落と考えられている。砂部遺跡では、全国的に発見例の少ない土器焼成土坑が複数検出されており注目される。

中期の遺跡としては、美乃利遺跡が継続しており、発掘成果の詳細な分析によって、微高地の拡大に伴って竪穴建物跡やそれを囲う環濠が築かれる様子が復元されている(山田1997)。また、美乃利遺跡の南西側に隣接する溝之口遺跡では、中期に集落が成立し、美乃利遺跡をしのぐ大規模集落へと発展する。開発に伴う調査が広範囲に実施されたことで、竪穴建物が密集する居住域、方形周溝墓を主体とする墓域、水田が営まれた生産域という集落景観が明らかにされつつある。溝之口遺跡出土の豊富な土器群は、東播磨の中期弥生土器の基準資料として紹介されることも多い。溝之口遺跡の南東に隣接する坂元遺跡では、中期後半の遺構が多数調査されている。台地の縁辺に竪穴建物跡や土坑が



遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
2	神野城山遺跡	旧石器	87	西条 40 号墳	古墳	279	地蔵寺 6 号墳	古墳
4	日岡山遺跡	旧石器	88	西条 51 号墳	古墳	282	水足 2 号墳	古墳
5	宮山遺跡	縄文－平安	89	西条 32 号墓	弥生	287	成福寺 3 号墳	古墳
8	東沖吉遺跡	弥生・古墳	90	西条 53 号墳	古墳	288	成福寺 4 号墳	古墳
9	砂部遺跡	縄文－奈良	91	西条 58 号墳	古墳	289	下村遺跡	弥生－平安
10	溝之口遺跡	弥生－平安	92	西条 59 号墳	古墳	292	北在家遺跡	弥生・古墳
11	平山遺跡	弥生	93	西条 61 号墳	古墳	294	栗津遺跡	弥生・古墳
12	望塚（鉢塚）	弥生	94	西条 61-2 号墳	古墳	299-303	池尻 55-59 号墳	古墳
13	中西台地遺跡	弥生－中世	95	二塚 1 号墳	古墳	305	真平塚古墳	古墳
14	中西低地遺跡	弥生－中世	96	二塚 2 号墳	古墳	333	平山 4 号墳	古墳
15	仲吉遺跡	弥生	97	若神社古墳	古墳	357	平野遺跡	弥生
16	今福遺跡	弥生	98-117	日岡山 1-20 号墳	古墳	478	佐伯寺跡	平安
19	大川山遺跡	弥生	118	石守 1 号墳	古墳	480	石守 2 号墳	古墳
20	播磨堂遺跡	古墳	119	水足 1 号墳	古墳	481	石守 3 号墳	古墳
22	東高塚古墳	古墳	130	飯盛山 5 号墳	古墳	484	穀音堂遺跡	旧石器
24	孫塚古墳	古墳	131	飯盛山 6 号墳	古墳	485	西条遺跡（但野神野遺跡）	縄文－平安
25	勤使塚古墳	古墳	132-136	地蔵寺 1-5 号墳	古墳	488	古代山陽道	奈良
26	ひれ塚古墳	古墳	137-139	平山 1-3 号墳	古墳	490	上村遺跡跡	奈良
27	西高塚古墳	古墳	140-151	池尻 3-14 号墳	古墳	508	石守 4 号墳	古墳
28	南大塚古墳	古墳	152	升田山 15 号墳	古墳	509	石守 5 号墳	古墳
29	西大塚古墳	古墳	153	池尻 16 号墳	古墳	518	升田山 11 号墳	古墳
30	北大塚古墳	古墳	154	池尻 17 号墳	古墳	519	升田山 12 号墳	古墳
31	人塚古墳	古墳	155-164	池尻 19-28 号墳	古墳	528	松岡青龍塚	近世
32	尼塚古墳	古墳	165-172	池尻 30-37 号墳	古墳	560	西村遺跡	弥生－奈良
33	行手塚古墳	古墳	173-181	池尻 38-46 号墳	古墳	607	升田山 13 号墳	古墳
34	宮山大塚古墳	古墳	182-189	池尻 47-54 号墳	古墳	608	升田山 14 号墳	古墳
43	西山大塚古墳	古墳	190-199	升田山 1-10 号墳	古墳	611	天神前遺跡	中世
44	池尻 2 号墳	古墳	200	天下原古墳	古墳	614	鶴林寺	平安
45	カンヌ塚古墳	古墳	205	神吉山 5 号墳	古墳	615	鶴林遺跡	弥生
49	酒ノ尻古墳	古墳	212	尾上遺跡	弥生・古墳	617	良野遺跡	弥生
50	成福寺 1 号墳	古墳	218	美乃利遺跡	弥生－中世	618	東沢 4 号墳	古墳
51	成福寺 2 号墳	古墳	219	升田遺跡	奈良	621	教信寺	平安・中世
53	西田池 2 号墳	古墳	220	古大内城跡	奈良	622	栗津大年遺跡	中世
54	西田池 3 号墳	古墳	221	吉神南遺跡	弥生－奈良	623	天王山 1 号墳	中世
55-60	宮山 1-6 号墳	古墳	222	天下原遺跡	弥生－奈良	624	天王山 2 号墳	中世
61	城山 1 号墳	古墳	223	野口庭寺	奈良	625	天王山 3 号墳	古墳
62	西条 1 号墳	古墳	224	溝之口摩寺	奈良	626	天王山 4 号墳	古墳
63	西条 2 号墳	古墳	225	石守魔寺	奈良	627	天王山 5 号墳	古墳
64	西条 3 号墳	古墳	226	西条鬼寺	奈良	628	東沢 2 号墳	古墳
65	西条 4 号墳	古墳	227	古堂原寺	奈良	629	東沢中遺跡	弥生
66	西条 6 号墳	古墳	228	中西廢寺	奈良	630	東沢 1 号墳	古墳
67	西条 7 号墳	古墳	229	西条藏石器群	中世	631	神野大林古窯跡 1 号窯	古墳
68	西条 9 号墳	古墳	230	西条土壙墓	中世	632	神野大林古窯跡 2 号窯	古墳
69	西条 10 号墳	古墳	231	日岡山兼桓墓	弥生	633	神野大林古窯跡 3 号窯	古墳
70	西条 12 号墳	古墳	234	日岡山遺跡	弥生・古墳	634	坂元遺跡	縄文－中世
71	西条 13 号墳	古墳	238	下村古墳	古墳	635	神野北山遺跡	古墳
72	西条 14 号墳	古墳	241	古大内城跡	中世	636	大野遺跡	平安・中世
73	西条 21 号墳	古墳	242	西条城跡	中世	637	大塚遺跡	中世
74	西条 21-2 号墳	古墳	243	石碑城跡	中世	641	前谷遺跡	奈良・平安
75	西条 23 号墳	古墳	245	横倉城跡	中世	642	東沢 5 号墳	古墳
76	西条 24・26・27・28・29 号墳	古墳	246	安田構居跡	中世	644	片山遺跡	弥生－中世
77	西条 25 号墳	古墳	248	右守構居跡	中世	645	皿辻遺跡	中世
78	西条 29 号墳	古墳	249	手末構居跡	中世	646	庄沢山遺跡	古墳－平安
79	西条 31 号墳	古墳	250	高田構居跡	中世	647	西田池南遺跡	奈良・平安
80	西条 32 号墳	古墳	251	中津構居跡	中世	648	天王山 4 号墳	古墳
81	西条 34 号墳	古墳	256	神吉城跡	中世	649	天王山 5 号墳	古墳
82	西条 35 号墳	古墳	257	砂部構居跡	中世	650	東沢 3 号墳	古墳
83	西条 36 号墳	古墳	259	剪口城跡	中世	651	神野山中遺跡	古墳
84	西条 37 号墳	古墳	260	長砂構居跡	中世	652	広畠遺跡	奈良－中世
85	西条 38 号墳	古墳	261	稚田構居跡	中世	653	西河原遺跡	奈良・平安
86	西条 39 号墳	古墳	277	池尻 18 号墳	古墳			

表1 周辺の遺跡

あり、その北側には広範囲に方形周溝墓が分布している。水田に関連すると考えられる溝状遺構なども複数存在し、同時期に隣り合う溝之口遺跡との関係が注目される。

一方、今回調査地東側のいなみの台地上では、集落の様相が分かる遺跡は少ないものの、城山の南側に西条廃寺下層遺跡（226）があり^{〔註3〕}、古代寺院の下層から円形の竪穴建物跡が検出されている。さらに東側の台地縁辺には望塚（12）があり、扁平錐式6区袈裟瓣文の銅鐸^{〔註4〕}1点が発見されている。大正期の耕地整理の際に塚の下から出土したと伝えられているが、平成19（2007）年に行われた兵庫県教育委員会による「通称望塚」の発掘調査では、銅鐸を埋納した痕跡等は確認されず、塚は耕地整理後に造られたものであることが明らかにされた（山田 2012）。そのため、銅鐸の正確な出土地点は不明とされている。なお、大正期の耕地整理の際には上部の塚から古墳時代の遺物が出土したとの言い伝えもあり、塚と銅鐸に直接的な関連性はないと考えられている。発掘調査後の望塚は、発掘現場の北側に移設されている。望塚よりさらに東の台地縁辺には片山遺跡（644）がある。近年の発掘調査において方形周溝墓が複数調査されている。高台で行われた祭祀の場としての望塚や、墓域としての片山遺跡に対して、その北側にある低位段丘上には弥生時代の集落跡として下村遺跡（289）が登録されている。本格的な調査が行われたことがなく詳細は不明ながら、この地域における中心集落とも言われ注目される（置田 1989）。

加古川の右岸側では、沖積地内に前期から継続する砂部遺跡があり、丘陵上には中期のみ短期的に存続した集落と考えられる平山遺跡（11）などがある。

後期の遺跡としては、引き続き美乃利遺跡・溝之口遺跡・坂元遺跡で集落の痕跡が確認されている。各遺跡とも後期前半においては集落規模の縮小や断絶がみられるが、後期後半以降は美乃利遺跡を中心に竪穴建物跡などが検出されている。終末期（庄内式並行期）には、美乃利遺跡で工房跡と考えられる六角形の竪穴建物跡や完形の遺物を含む土坑が検出され、土坑からは特殊な形態と文様を持つ器台なども出土している（友久 2018）。これらの遺跡の周辺には、栗津遺跡（294）、北在家遺跡（292）など小規模な集落遺跡が点在しており、上記拠点集落からの分村集落とも考えられている（置田 1989）。

今回調査地の東側では、曇川の対岸にある低位段丘上に手末遺跡（249）がある^{〔註5〕}。平面六角形の竪穴建物跡が調査され、遺構廃絶時に投棄されたと考えられる大量の土器が出土している。その北側には西条遺跡があり、ほ場整備に伴う確認調査において大型の竪穴建物跡が検出されている。さらに東の城山の麓には、後期後半の墳丘墓として著名な西条52号墓（89）がある。開発によってすでに消滅しているが、工事直前に緊急発掘が行われ、円丘部と突出部によって構成されていること、石櫛を伴う埋葬施設を持つことなどが確かめられた。石櫛内に落ち込んだ状態で内行花文鏡などが出土している。ほかに、いなみの台地縁辺部沿いにおいて、土器棺墓が検出された播磨堂遺跡（20）や大日山遺跡（19）などがあり、片山遺跡では竪穴建物跡が調査されている。

加古川右岸側では、下流の沖積地に引き続き砂部遺跡があり、その北西段丘上の岸遺跡ではまとまった土器の出土が認められるが、いずれも遺構は乏しい。丘陵地では、平荘湖の西側に所在する神吉山遺跡（東神吉町神吉）、神吉山5号墓（205）が墳丘墓として登録され、東側の上莊町見土呂には、みとろフルーツパーク内に八ツ塚3号墓が墳丘墓として知られている。

古墳時代 古墳時代は、集落遺跡の発見例や調査事例が少なく詳細な検討は進んでいない。対して、加古川流域一帯に築かれた豊富な古墳群の様相について多くの研究や報告がなされている。

前期の古墳としては、今回調査地を含む日岡山古墳群が代表的である。宮内庁が所管するひれ墓古

墳（26）をはじめ^{〔註4〕}、これまで8基の古墳が前期古墳として登録されていたが、今回調査を実施した神納塚古墳の発見によって合計9基となった。これらのうち、ひれ墓古墳・勒使塚古墳（25）、西大塚古墳（29）、南大塚古墳（28）、北大塚古墳（30）の5基は前方後円墳で、狐塚古墳（24）、東車塚古墳（22、すでに消滅）、西車塚古墳（27）の3基は変形や消滅のため明確な形状はわからないものの、中・小規模の円墳もしくは前方後円墳と考えられている。本書で報告する神納塚古墳は、削平が著しいものの円墳である可能性が高い（第Ⅱ章参照）。

ひれ墓古墳は、宮内庁により景行天皇の皇后にあたる「福日大郎姫命」の陵墓に比定され管理されている。古墳の位置や規模・形態から、古墳群中で最も古くに築かれたと考えられている。神納塚古墳以外はこれまで本格的な発掘調査が行われたことはないが、近代以降の土取り工事や表面採集によって、埋葬施設や副葬品の一端が知られている。採集された遺物としては、南大塚古墳や勒使塚古墳から三角縁神獸鏡・方格T字文鏡・獸文鏡及び石劍2点、北大塚古墳から埴輪片や短甲片などがある。前方後円墳が連続して築かれていることや、これまで採集された遺物の内容から、この古墳群の被葬者集団は畿内政権と強い結びつきがあったものと考えられている。

その他の前期古墳としては、今回調査地から南西4kmのいなみの台地南端部にあたる低位段丘上に聖陵山古墳（野口町長砂）が単独で所在しており、海岸部に近い特異な位置を占めていることで注目される。前方後円墳もしくは前方後方墳と伝えられるが、これまで発掘調査が行われたことはなく前方部はすでに失われている。今回調査地東側の台地先端部には、宮山大塚古墳（34）を中心とする宮山古墳群がある。宮山大塚古墳は、前期の円墳として紹介された例や（上田1983）、中期の帆立貝形古墳として紹介された例があるが（加古川市教育委員会1995）、本格的な発掘調査が行われたことはなく詳細は不明である。また、宮山大塚古墳周辺の小古墳は横穴式石室を伴う後期の円墳である（55～60）。加古川右岸側では、上荘町薬栗に前方後円墳（長慶寺山1号墳）があり、堅穴式石室の痕跡と考えられる粘土床状の施設が調査され、内行花文鏡や武器・農工具が出土している。その北東側の上荘町小野には天坊山古墳があり、円墳とされる墳丘から2基の堅穴式石室が検出され、そのうちの1基から上方作系獸帶鏡・銅鏡・武器・農工具が、他の1基からは画文帶神獸鏡片・管玉・銅鏡・鉄劍・鉄斧が出土している。

集落遺跡としては、今回調査地南西にある溝之口遺跡において堅穴建物跡1棟の調査事例が報告されており（石野、松下1969）、日岡山古墳群の母体となる集落が加古川下流域の平野部に存在する可能性が指摘されているが（西谷1989）、この時期の拠点集落と言えるような規模の遺跡は今のところ確認されていない。

中期の古墳としては、日岡山でみられたような首長墓墳が東側の西条地区の丘陵地において築かれるようになる。前方後円墳の行者塚古墳（31）、造り出し付円墳（帆立貝形古墳）の人塚古墳（33）及び尼塚古墳（32）という3基の大型古墳が西条古墳群として国史跡に指定され保存整備されている。整備に伴う基礎調査として行われた行者塚古墳の発掘調査では、墳頂部や造り出しのトレンチ調査が行われ、墳頂部から大量の舶載品を納めた副葬品箱が検出され、造り出しの調査では祭祀跡の様子が良好な状態で発見されるなど数々の重要な成果があった。中期後半には、加古川右岸で平荘湖古墳群が新たに築かれる。平荘湖古墳群は、カンス塚古墳（45）や池尻2号墳（44）に代表される堅穴式石室ないし堅穴式横口式石室を埋葬施設とする段階から、升田山15号墳（152）や池尻16号墳（153）に代表される横穴式石室を埋葬施設とする段階まで合計68基の古墳が確認されており、後期まで連続する市内最大規模の古墳群である。ダム建設による緊急発掘において、馬具や金製耳飾などの渡来系遺物が多く副葬されていることが明らかにされた。古墳の多くが昭和41（1966）年に造られた人

工湖である平莊湖の湖底へと没し、現在は墳丘を確認することはできない。

中期の集落遺跡としては、引き続き溝之口遺跡が存続し、その南側の沖積地に立地する北在家遺跡でも堅穴建物跡が検出されている。溝之口遺跡では、遺跡範囲の南端付近で調査された堅穴建物跡から複数の韓式系土器が出土しており、遺物包含層には初期須恵器や陶質土器が含まれるなど、渡来系集団との関連が考えられ、同じく渡来系遺物が多数副葬されていた行者塚古墳と同時期の集落遺跡として注目される（篠宮 2006）。似たような事例として、加古川右岸側では砂部遺跡で掘立柱建物跡や構造遺構、土坑が調査され、韓式系土器が複数出土しており、平莊湖古墳群との関係が注目される。

後期の古墳としては、中期後半から継続する平莊湖古墳群が代表的であるが、市内各所に円墳や方墳が數多く築かれている。中期に古墳が築かれなくなる日岡山古墳群においても、6世紀から7世紀にかけて小型の後期古墳が築かれるようになり、20基が遺跡登録されている（98～117）。多くは横穴式石室を埋葬主体とした円墳と考えられるが、昭和33（1958）年以降に始まった日岡山公園の造成工事によってそのほとんどが消滅しており詳細は不明である。

後期の集落遺跡としては、溝之口遺跡で引き続き堅穴建物跡の調査事例がある。また、東隣の坂元遺跡では、広範囲にわたる発掘調査によって、堅穴建物跡などを中心とする居住域とその周辺に築かれた小規模な古墳群及び生産域となる水田跡を検出している。さらに、古墳群近くの段丘崖を利用した埴輪窯も発見され、石見型盾形埴輪をはじめ、古墳群に用いるための各種の埴輪を焼成していたことがわかっている。

また、後期になってからの新たな動きとして、須恵器の窯が加古川市域でも築かれるようになる。今回調査地の東側の曇川沿岸には神野大林窯跡群（631～633）があり、さらに東側の草谷川沿岸には野村古窯跡群（八幡町下村）が知られている。

奈良時代・平安時代 奈良時代は、律令制の導入により新たな行政単位が設けられた時代であり、加古川下流域の左岸側は播磨国賀古郡に、右岸側は同国印南郡に含まれる。この時代の特徴的な遺跡としては、いなみの台地南側の縁辺あたりを通っていたとされる古代山陽道（488）があり、その山陽道沿いには賀古駅家に比定されている古大内遺跡（220）がある。兵庫県教育委員会により、賀古駅家の入口付近が発掘調査されている（中川編 2010）。また、古墳に替わって古代寺院が出現することも大きな変化である。

今回調査地周辺の奈良時代の遺跡としては、東側の曇川沿岸に石守庵寺（225）がある。法隆寺式の伽藍配置を基準とし、この地域で産出される竜山石（流紋岩質凝灰岩）製の心礎を持つ塔跡や瓦積基壇で構築された金堂跡などが調査されている。曇川を超えた東側には西条古墳群と同じ台地上に西条庵寺（226）がある。発掘調査によって精緻に組まれた瓦積基壇が検出され、竜山石製の心礎を持つ塔跡や金堂・講堂などが調査されている。石守庵寺と同様に法隆寺式の伽藍配置を示す。昭和44（1969）年に兵庫県の指定史跡となっており、平成6（1994）年に史跡公園としての整備が完了している。その他の古代寺院としては、賀古駅家に比定される古大内遺跡の北東側に野口庵寺（223）がある。発掘調査の結果、瓦積基壇で構築された塔・講堂・小堂宇が確認されている。加古川右岸側では、沖積地を望む段丘上に中西庵寺（228）がある。発掘調査は行われていないが、採集された瓦から平安時代後期まで存続したことがわかっている。

官衙的な性格を持つ遺跡としては、溝之口遺跡において、遺跡範囲の北側を中心に櫛列や構造遺構に囲まれて「コ」字形に配置された掘立柱建物跡や、倉庫群と考えられる多数の掘立柱建物跡、井戸などが調査されている（加古川市教育委員会 1992）。「大穀」と記された墨書き土器や銅製・石製の鉤

たとい

帶具などが出土したことから「賀古郡衙」の候補地となっており、北側に隣接する美乃利遺跡からは「郡」と記された墨書き器なども出土している。さらに、溝之口遺跡にほど近い坂元遺跡、大野遺跡(636)からも同時期の遺構・遺物が多数確認されており、坂元遺跡では8世紀後半に建物の大幅な配置転換が行われ、建物の軸方向が条理制の地割に対応したものへと変化する様子が解明されている(西口2009)。坂元遺跡は、賀古駅家における駅務を負担する駅戸集落の有力候補とされ、「駅」または「郡」と読める墨書き器や円面鏡などが出土している。ほかに、溝之口遺跡の遺跡範囲北端は、古代瓦が表面採取されたことを理由に「溝之口廃寺(224)」として遺跡登録されているが詳細は不明であり、古代寺院というよりは郡衙との関連で解釈したほうがよさそうである。

平安時代は、先述した古代寺院の多くが9世紀までにいったん廃絶する傾向がみられ、その理由として、『日本三代実録』に播磨諸郡の官舍・諸定額寺の堂塔が悉く倒壊したことが載る、貞觀10(868)年の播磨国大地震との関連が指摘されている。後期までは、新たな寺院として鶴林寺(614)、佐伯寺跡(478)、教信寺(621)などが成立したと考えられる。鶴林寺は、聖德太子の建立という縁起を持つが、本尊の薬師如来像や法華堂(太子堂)・常行堂の年代観から、この時期に伽藍が整えられたとする説が有力である。また、10世紀初めに編纂された『延喜式』には、賀古郡・印南郡のうち唯一の式内社として日岡坐天伊佐主比古神社(日岡神社)が掲載されている。

今回調査地周辺の集落遺跡としては、南西側にある美乃利遺跡・大野遺跡・溝之口遺跡・坂元遺跡などで、溝状遺構や井戸とともに広範囲に点在する掘立柱建物跡が調査されており、後期頃には加古川左岸低地部での開拓がかなり進んでいた様子が看取される。東側の曇川沿岸にある西条遺跡では、確認調査などで当該時期の遺物が多数出土しており、本格的な調査は行われたことがないものの、集落が存在する可能性が高い。

鎌倉時代・室町時代 市内全域で調査事例が少なく、内容のわかる遺跡は僅かである。

今回調査地周辺の遺跡としては、美乃利遺跡において鎌倉時代の掘立柱建物跡や屋敷墓が検出され、坂元遺跡では掘立柱建物跡や水田跡などが検出されている。美乃利遺跡に接する大野遺跡では、やはり鎌倉時代の掘立柱建物跡や墓が検出されている。また、同じ沖積低地に立地する栗津大年遺跡(622)では、室町時代まで続く掘立柱建物跡や木棺墓などが検出されている。いずれの遺跡も集落跡と考えられる。東側のいなみの台地上では、城山の中腹に西条蕨骨器群(229)や西条土塙墓(230)が鎌倉時代の遺跡として登録されている。加古川右岸側では、中西台地遺跡(13)において方形居館に付属する堀が調査されている。ほかに、具体的な調査事例は乏しいものの、室町時代に築かれたとされる城や構居が数多く存在したことが文献資料の分析などからわかっている。戦国期の羽柴秀吉による播磨平定に深く関わる加古川城跡(263)、野口城跡(259)、神吉城跡(256)をはじめ、今回調査地周辺にも石守構居跡(248)、中津構居跡(251)、手末構居跡(249)、高田構居跡(250)、西条城跡(242)などが遺跡登録されている。なお、加古川城跡については、鎌倉時代を通じて播磨守護所が置かれていた可能性があり、城として活用される以前の様相にも注意を払う必要がある。

江戸時代以降 今回調査地周辺は、江戸時代をとおして姫路藩領の農村地域であった。一方、現在の加古川町寺家町周辺は、京都から下関を通り長崎に至る西国街道(中国路)の重要な宿場町として栄え、加古川には舟運の高潮船が往来し内陸部との物流の拠点であった。

江戸時代の遺跡は、中期に俳人として活躍した松岡青蘿の墓所が「松岡青蘿墓」(528)として登録されている。また、平成16(2004)年に実施された坂元遺跡の発掘調査では、道路の側溝と考えら

れる構状遺構が検出され、西国街道の一部と推定されている（岸本 2011）。

明治時代になると、加古川には橋が架けられ、明治 21（1888）年に山陽鉄道（現 JR 山陽本線）が開通し、明治 31（1898）年には日本毛織工場の操業が始まるなど近代化が進む一方、宿場町としての機能は衰えていった。大正 2（1913）年には播州鉄道（現 JR 加古川線）が開通したことであらわ舟も姿を消した。

昭和 12（1937）年に始まる日中戦争及びそれに続く太平洋戦争の際には、交通の便利な加古川地域に多数の軍事施設が設けられることとなり、「小軍都」の様相となる。尾上方面に陸軍加古川飛行場や陸軍航空通信学校尾上教育隊、野口方面には陸軍高射砲第三連隊基地が置かれ、今回調査地に隣接する現加古川刑務所一帯は、陸軍航空補給廠神野出張所として爆弾の製造や保管場所として利用され、加古川駅と繋がる鉄道も敷設された。

戦後には、復興への動きの中で昭和 25（1950）年に加古川町、尾上村、神野村、野口村、平岡村の5か町村解消合併による「加古川市」が誕生し、その後、別府町、八幡村、平荘村、上荘村、東神吉村、西神吉村、米田町の一部の合併や金沢町の新設があり、昭和 54（1979）年の志方町との合併を経て現在の市域となった。

現在の加古川市は、播磨灘沿岸の工業地帯や神戸・大阪方面のベッドタウンとして栄えている。

第 5 節 基本層序

今回報告する神納塚古墳及び広沢山遺跡の発掘調査は、第 2 節で述べたとおり一連の調査として同時に実施したことから、基本層序については本項で一括して記述する。

今回調査地は、調査前までアスファルト舗装された公園駐車場として利用されてきた土地である。アスファルト上面での標高は 28.9 ~ 29.1 m を測りほぼ平坦であった。発掘調査は、このアスファルト舗装を除去した後に着手しているため、第 8 図に示す基本層序はアスファルト除去後の状況である。

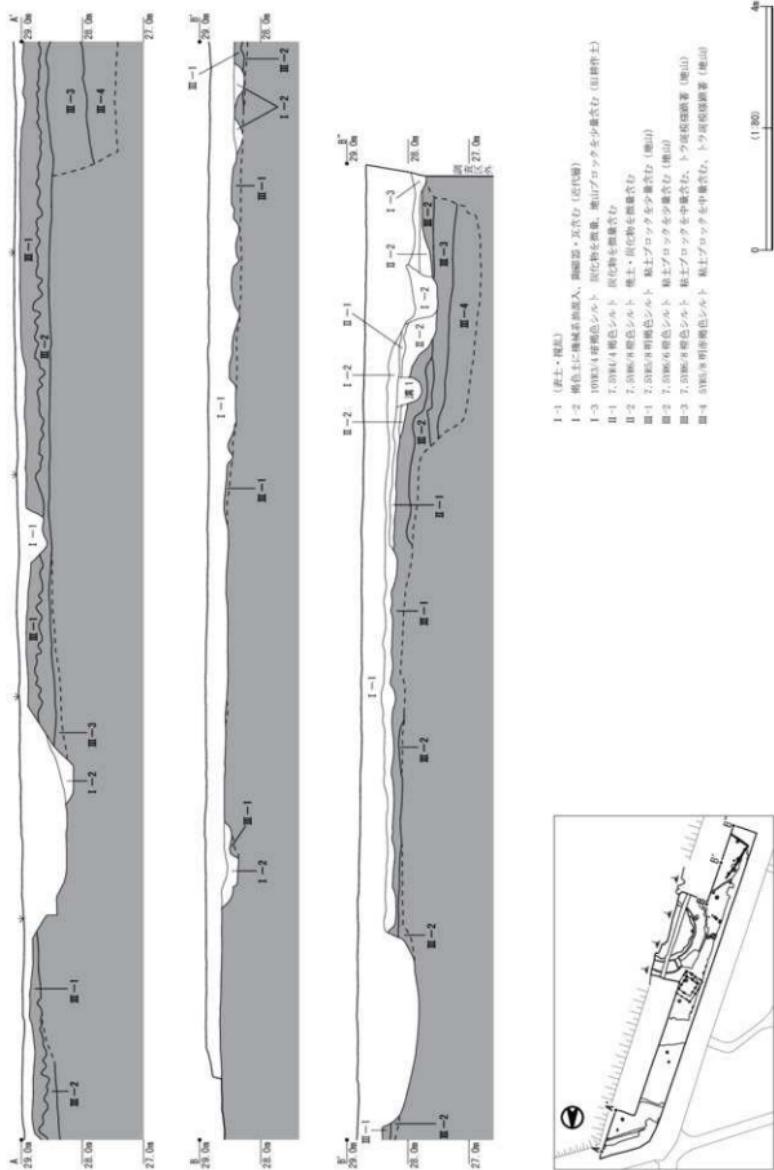
今回調査地における基本層序は、大きく 3 段階（第 I ~ III 層）の堆積により成り立っている（第 8 図）。

第 I 層は、アスファルトの直下に堆積していた旧表土（I -1 層）や近代以降の掘りこみなどの堆積層（I -2 層）、旧耕作土層（I -3 層）である。旧表土は北側で約 0.15 m と薄く、南側では約 0.8 m と厚く堆積している。旧地形が低くなる南端付近を除いて、大部分は第 I 層の直下が自然堆積層（いわゆる「地山」）となっており、近代以降に地山を削平して平坦面を造り出し土地利用していたものと考えられる。

第 II 層は、古代の遺構が掘りこまれる整地層である。調査区南端付近の、旧地形が低くなる範囲で限局的に確認でき、本層上面において溝 1 を検出している。第 II 層自体には遺物を含んでいないため明確な堆積の時期は不明だが、溝 1 周辺の窪地を平坦に均すための整地層とみられ、その成立は溝 1 の時期と大きな隔たりはないものと考えられる。

第 III 層は、人為的な改変を受けていない自然堆積層（地山）である。調査区南端部以外は I 層の表土直下が明褐色シルトの III -1 層となっており、本層上面が今回調査における主要な遺構検出面である。III -3・4 層は、橙色や赤褐色のシルトに白色系の粘土や砂が混じる顕著なトラバ模様を呈し、段丘の基盤となる大阪層群最上部の堆積層と考えられる。

III - 3 層上面での標高を比較すると、調査区北側では 28.4 m、南側では 27.5 m を示し、元々の地形が南へ向かって下っていたことが分かる。調査区南端付近を除いた III -1 層の直上には、近代以降の堆積層である I 層が堆積していて、元々の地表面を構成していたはずの土壤化層の痕跡が認められ

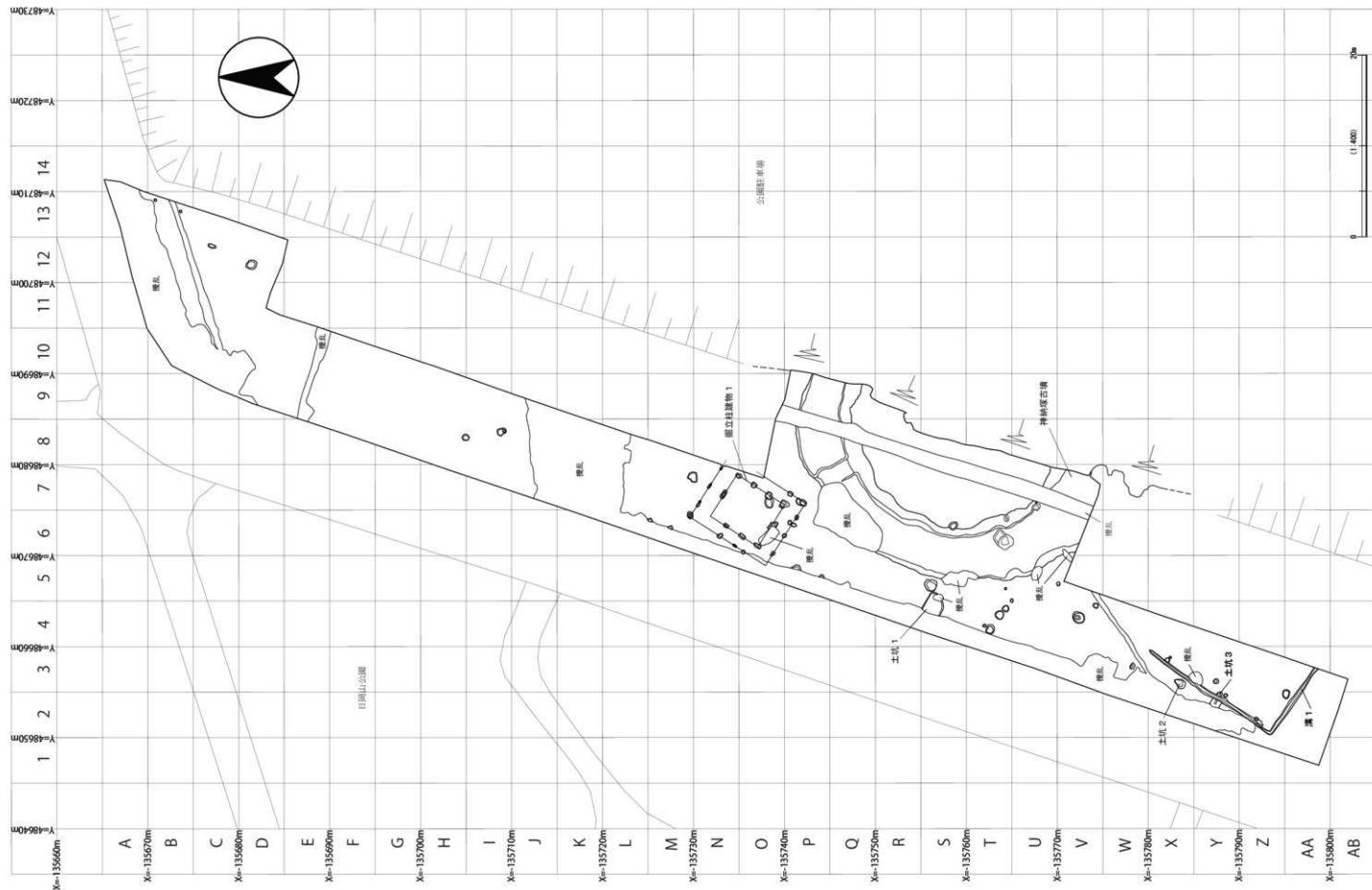


ないことから、昭和期の旧陸軍施設が置かれて以降大規模な削平を被った可能性が高い。

註1) 西条遺跡は、現地での字名に対応させるため、平成31年度に「神野遺跡」から名称変更した遺跡である。
註2) 現在登録されている遺跡名称は「西条庵寺」だが、古代寺院と区別するため表記の遺跡名を通称として用いている。

註3) 手末遺跡は、現在登録されている遺跡名称は「手末構居跡」だが、中世城館と区別するため表記の遺跡名を通称として用いている。

註4) ひれ墓古墳は、「日岡陵古墳」「日岡御陵」と呼称されることも多いが、本報告書では遺跡台帳に登録されている遺跡名称を用いている。



第9図 造機配置図

第Ⅱ章 神納塚古墳

第1節 概要

調査概要 神納塚古墳は、日岡山公園の再整備事業に伴う広沢山遺跡の発掘調査中に偶然発見された古墳である。調査地は、第1章で述べたとおりアスファルト舗装された駐車場として使われてきた土地で、元々の地形は大きく変更を受けた状態であった。神納塚古墳もすでに大きく削平されており、今回調査で検出した部分は古墳の周濠のみで、墳丘や埋葬施設はすでに失われていた。また、古墳の東側半分は整備事業着手前からすでに2mほど低い土地になっており、周濠も含め古墳の痕跡は完全に失われていた（第9図）。加えて、今回調査を実施した残りの周濠部分についても、深さは0.3m前後と浅いため、周濠上面も削平を受けている可能性が高いといえる。このように、構造の遺存状態としては決して良好と言えない状態であったが、調査の結果、周濠内から埴輪が出土し、これまで本格的な調査が行われたことのなかった日岡山古墳群を理解する上で貴重な情報を得ることができた。詳細は次節以降に述べるが、神納塚古墳は幅約6mの周濠が廻る径27mの円墳に復元でき、埴輪の年代観から古墳時代前中期頃の古墳と考えられる。

古墳が大きく削平を受けていたことについては、昭和初期の日中戦争から太平洋戦争にかけて存在した陸軍施設が大きく関係しているようである。現在、遺跡の東側に所在する加古川刑務所は、戦時に大阪陸軍航空補給廠野出張所が置かれていた土地である。主に兵器工場として利用され、加古川駅と連絡する鉄道が敷かれ、敷地内には弾薬庫や火薬庫が複数建てられていた。鉄道のプラットホームは敷地の西端にあった神納塚古墳の近くに設置され、このプラットホーム建設工事の際に神納塚古墳の墳丘東側を含めた一帯が一段低く削られ崖状になったものと考えられる。また、弾薬庫は不慮の爆発の際に周辺へ被害が及ばないように各棟個別に高い土壘で囲まれており（兵庫の「語りつごう戦争」展の会・兵庫歴史教育者協議会2013）、土壘構築のために周辺の古墳の墳丘盛土が削り取られたようである（西谷1996）。軍の敷地に接する位置にあった神納塚古墳の墳丘は、真っ先に土取りされ利用されたものと考えられる。

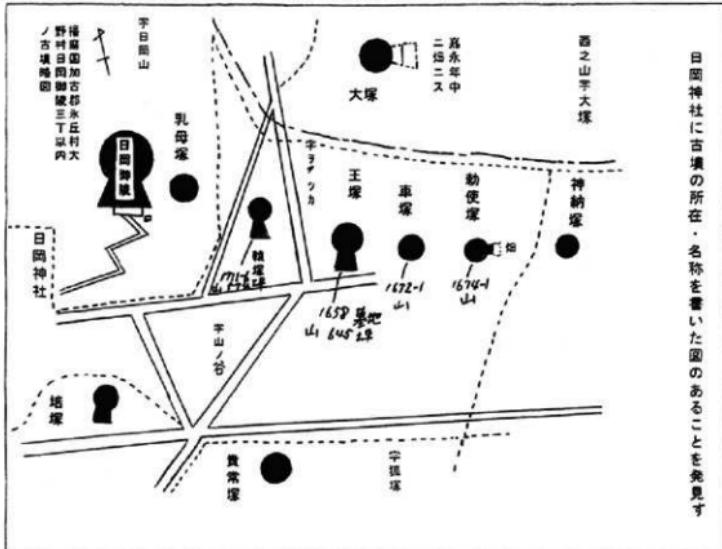
「神納塚古墳」の名称について 神納塚古墳は、現在刊行されている『加古川市遺跡分布地図－第3版－』には記載されていない新発見の古墳である。しかし、戦前の日岡山古墳群の様子を紹介した論文や日岡神社が所蔵していたという絵図面に古墳の存在を示す記述があり、それらを根拠に「神納塚古墳」の名称を決定した。

根拠とした論文は、昭和10（1935）年発表の赤松啓介氏の論文である（赤松1990）。氏は、この論文で日岡陵（ひれ墓古墳）の東側に点在する6基の古墳を第1号から第6号として紹介している。このうち、日岡山側から東へ第1号・第2号の前方後円墳とされたのは現在の西大塚・南大塚古墳であり、やや北に離れて前方部を「削去」された前方後円墳と記述されている第6号は北大塚古墳であることはほぼ確実である（第3図）。それ以外の第3号から第5号は円墳とされ、このうち第3号・第4号が西車塚・東車塚古墳を示しているものとみられ、現在の遺跡分布地図に存在しない第5号が存在したことがわかる。これが、今回発見の神納塚古墳に該当するものと考えられ、少なくとも昭和10年までは円墳としての形状を残していたことがわかる。なお、陸軍施設として古墳の東側が利用される

ようになるのは昭和 12 (1937) 年以降である。

日岡神社が所蔵していたという絵図面については、現在のところ原本を確認できていないが、昭和38（1963）年に永江幾久二氏が日岡神社を訪れた際に書き写した図が残っている（山本2017）。残念ながら原本の図がいつ頃作成されたかは明記されていないが、図中に「播磨国加古郡氷丘村大野村日岡御陵三丁以内ノ古墳略図」の見出しがあることから、ある程度は推測が可能である（第10図）。「氷丘村」は、明治22（1889）年の町村制実施時に誕生した村名である。大野村ほか5村が合併したもので、見出し中の「大野村」は氷丘村内の大字大野村を意味する。この氷丘村の呼称は、昭和12（1937）年に加古川町と併合することで使われなくなることから、この図は明治22年から昭和12年の間に描かれたものであると考えられ、少なくとも陸軍施設が置かれ周辺の景観や地形が大きく変化する前の状況を記していることは明らかである。

図には、6基の前方後円墳と4基の円墳が描かれている。そのうち5基には地番や地目が記されており、「神納塚」が描かれている場所以外の破線で囲まれた範囲には小字名が表記されている。各古墳の名称は現在遺跡台帳に登録されているものと異なるものも多いが、古墳の配置や小字名、地番などを手掛かりに、10基中8基については現在確認している古墳と対応させることが可能である。対応できないものは、図中に円墳として描かれている「乳母塚」と「神納塚」の2基である。このうち「日岡御陵」の東隣にある乳母塚については、このあたりにかつて後期古墳が集中して築かれていたことから（現在は消滅）、そのうちの大型のものではないかとの指摘がある（山本2017）。残る神納塚については、図の位置関係から今回発見の古墳である可能性が高く、加えて西隣にある「勅使塚」（現在の遺跡名では「東車塚古墳」に該当）との間に描かれた字界線が才オツカと字ヒロサワヤマとの境であると考えられることから、現在の字広沢山に所在する今回調査の古墳が「神納塚」である



第10図 「永江ノートによる日岡山古墳群分布図」(『東播磨』第23号、東播磨地域史講話会 2017年より転載)

蓋然性が高いと判断でき、先述の赤松氏の論文で紹介された「第5号」古墳もこの古墳を示しているものと考えられる。こうした検討を経て、今回調査を実施した古墳の名称を「神納塚古墳」に決定した。

なお、「神納塚」の読みを「かんのづか」としたことについては、現在の「^{かんの}神野町」の読みを当てたことによる。現在町名として用いている「神野」は、それ以前は「神納村」などの表記で書かれていた。また、さらにさかのぼれば、「神納村」は元々「加納村」であり、平安時代末期頃の勅旨田に由来するとの解釈もある（石見 1984）。

第2節 調査の成果

位置 神納塚古墳は、広沢山遺跡の調査区として設定した範囲のうち、グリッドPラインからVラインの範囲に位置する（第9図）。遺構確認面の高さは標高28.7 mで、現地表面から0.3 m下に位置する。

古墳の墳丘は、すでに述べたとおり全面的に削平されており、周濠の西側部分のみ残されていた。検出した周濠のうち、南側にあたるV6・7グリッド付近は、すでに工事が部分的に着手されていたため掘削できない部分があった。また、上端の一部は、杭跡の残る時期不明の土坑に切られている。周濠の埋土上層には、機械系油の混じる近代以降の盛土層が堆積しており、特に西端付近では周濠底面まで擾乱されている場所があった。ほかに、当該地が日岡山公園の駐車場として整備された際の電気ケーブル敷設に伴う溝状の擾乱が南北方向に走っており、周濠を分断している。

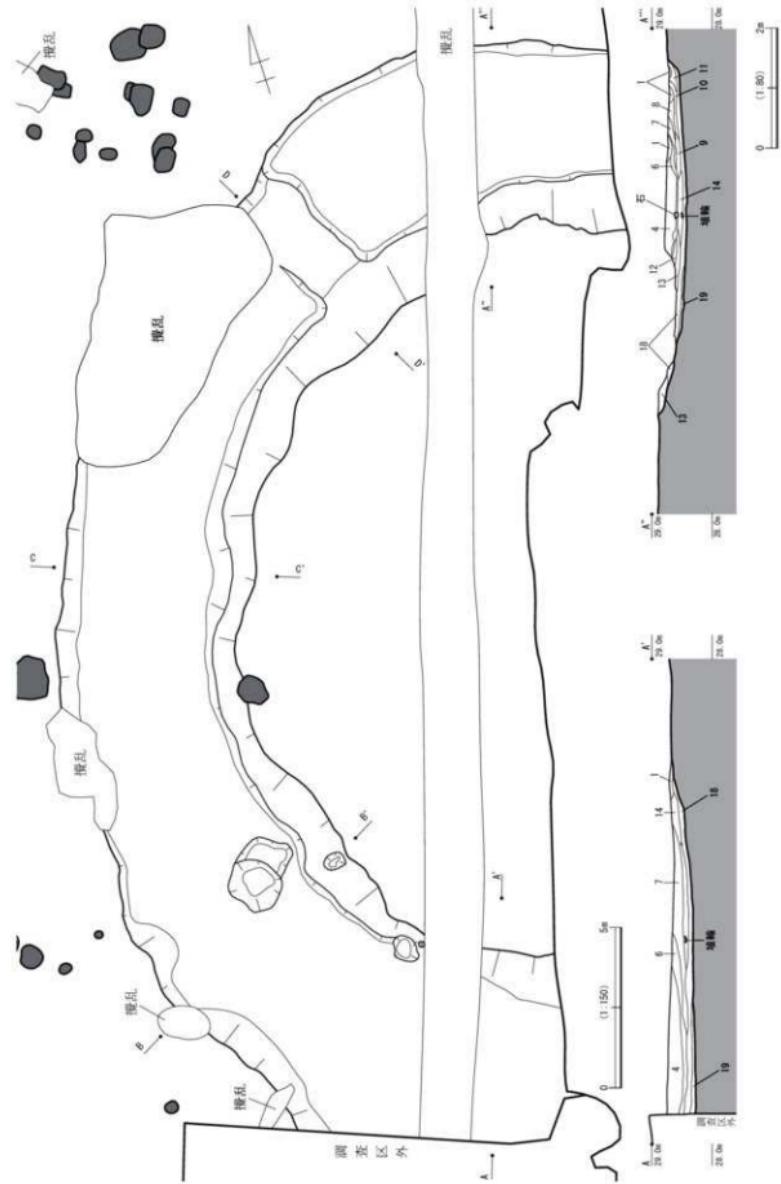
形態 検出した範囲での平面形は、削平や擾乱の影響により凹凸があるものの、おおむね半円形（半ドーナツ形）をしている（第11図、写真20）。周濠の断面形は皿状を呈し、周濠外側は底面から上端へ向けてやや急斜に立ち上がるのに対し、古墳の墳丘側にあたる周濠の内側は、底面から急斜に立ち上がったのち、上端へ向けて緩やかに開いている。底面は、部分的に植栽痕等による窪みがあるものの、標高28.3 m前後でおおむね平坦である。ただし、北側付近にあたるP・Q7グリッドには、底面が0.2 mほど高くなっている場所があり、墳丘側と外側を結ぶ幅1.7 mの土橋状を呈している。

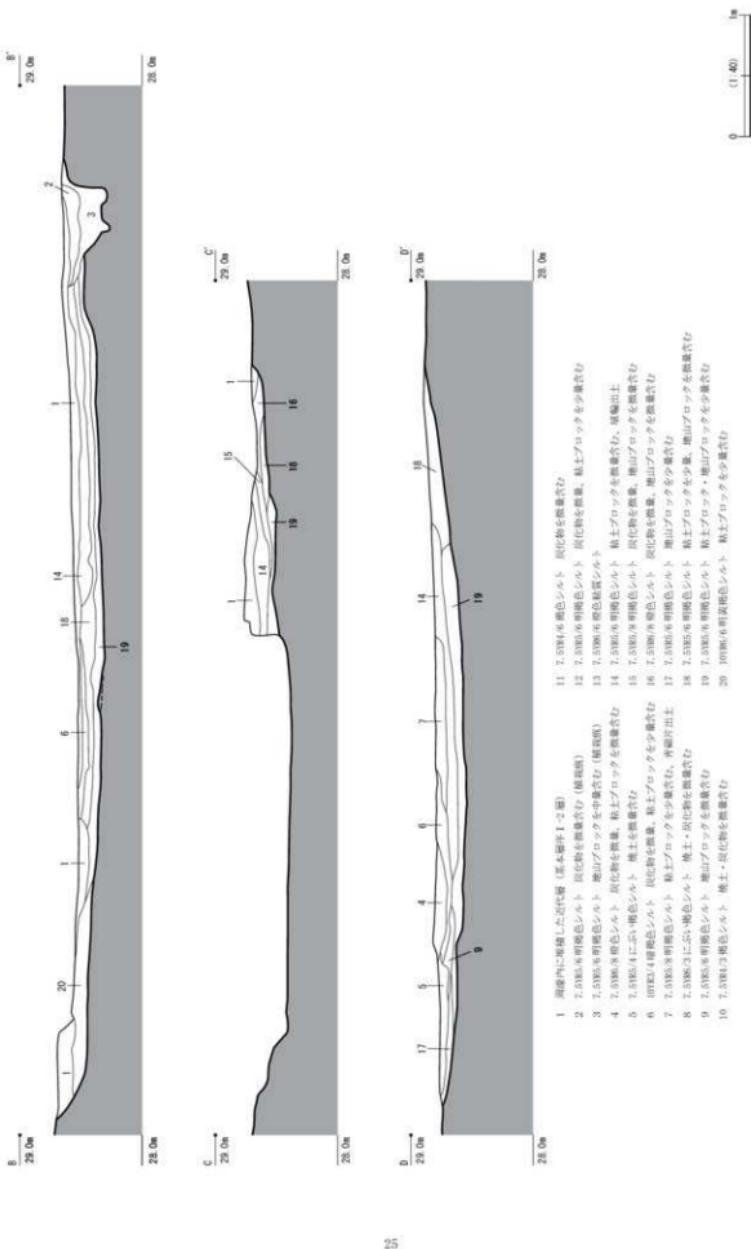
なお、古墳の東側が周濠も含めて完全に失われているため、東側に造り出しなどの付帯施設が存在した可能性もあるが、現況からは検討することができない。

規模 周濠の最大幅は6.9 m、最小幅は5.4 mを測り、おおむね6 m前後である。遺構確認面から底面までの深さは、最大で0.47 m、最小で0.24 mを測り、北側の土橋状の高まり部分は深さ0.24 mを測る。周濠内側の下端ラインで円形を復元すると、直径は約27 mとなる。

墳丘は削平され失われていることから、墳丘規模は墳丘側末端における転換点となる上記数値が妥当と考えられ、本古墳は幅約6 mの周濠に囲まれた径27 mの円墳と判断した。

土層 土層は周濠の5か所で確認し、合計20層に分層した（写真32～36）。このうち、第1層は近代以降の堆積土が周濠内の窪みに堆積したものである。第2層から第13層までは、少量の埴輪に加え、中・近世の陶磁器類や弥生時代頃と考えられる磨製石斧やサスカイト製剣片が混在する2次堆積層で、発掘調査時はここまでを上層とした。第14層は、すべての観察地点で確認され、粘土ブロックを含む明褐色シルトを主体とする特徴的な土質を示し、この堆積土中から埴輪片が集中して出土した。周濠上層や周濠を切る擾乱から出土した少量の埴輪を除けば、すべてこの層から出土した





第11図 神納塚古墳

ものである。この層は、墳丘側から周濠中央付近にかけて5cmほどの厚みで堆積しており、墳丘上からの流土と考えられる。第15・16・18層は、同じく墳丘側から周濠内に流入した堆積土と考えられるが、遺物をほとんど含まないことから、埴輪が転落する前の、初期の流土と考えられる。また、第17層は周濠の外側から流入した堆積土と考えられる。周濠の最下層に堆積する第19・20層は、明褐色や明黄褐色のシルトを主体とし、地山ブロックを含んでいることから、周濠掘削時の堆積層の可能性が考えられる。遺物は全く含まれていない。なお、埴輪が出土した第14層を含め、周濠内から葺石の存在を想定できるような礫の転落は認められない。

出土遺物 円筒埴輪を中心に出土し、形象埴輪が少量含まれる。ほかに、奈良時代の須恵器杯蓋、弥生時代と考えられる磨製石斧、サヌカイト製剝片、近世以降の瓦、陶磁器片などが出土した。詳細は第3節のとおりである。

遺構時期 墳丘上から転落したと考えられる第14層に含まれる埴輪の特徴から、神納塚古墳の築造時期は古墳時代前期末頃と判断した。

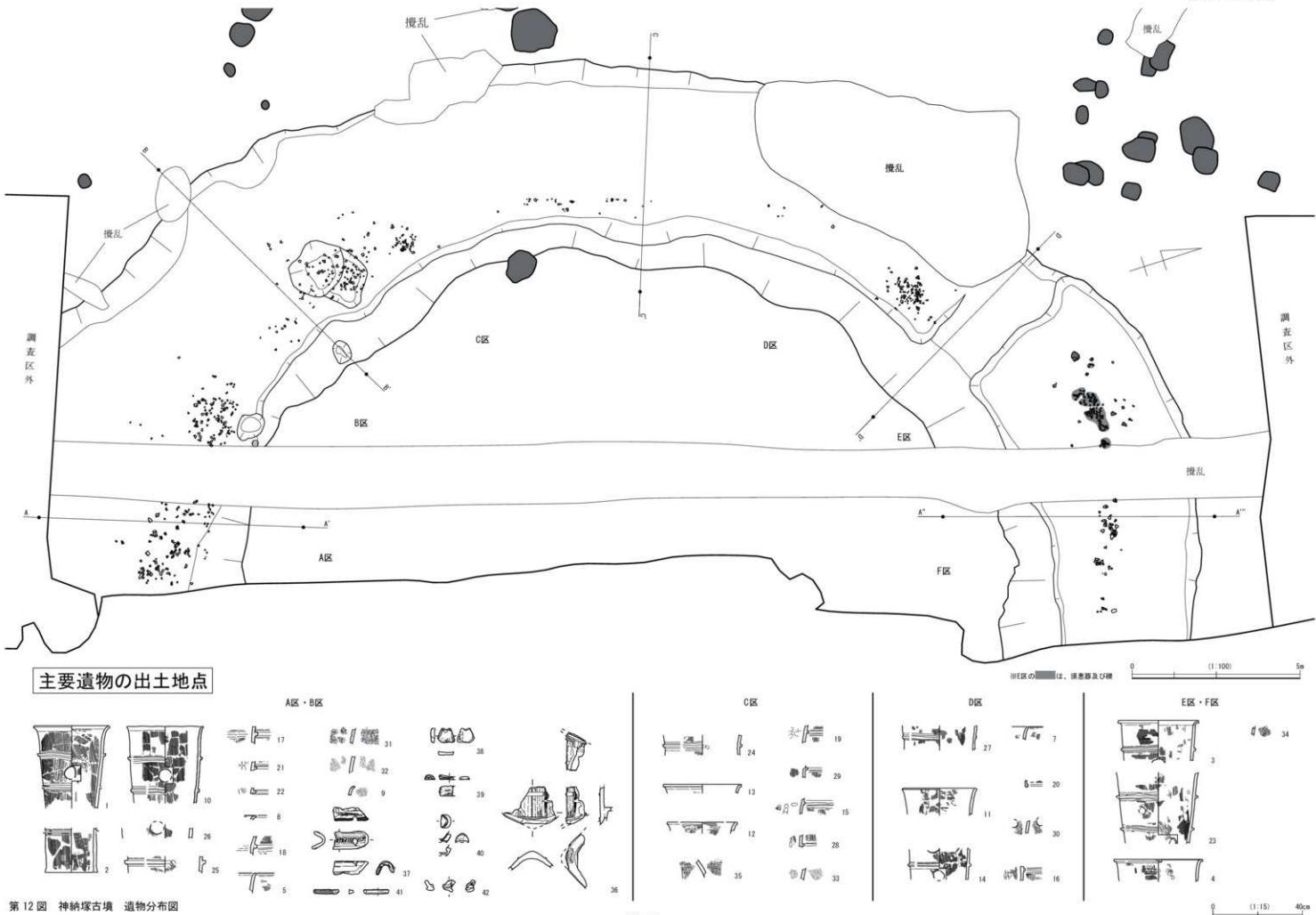
第3節 出土遺物

神納塚古墳の発掘調査では、遺物収納コンテナ14箱分の遺物が出土した。前節で述べたとおり、その大部分は周濠内の第14層から出土した埴輪片であり、それらに加えて周濠上層や周濠を切る擾乱からも少量の遺物が出土している。これらの遺物のうち、本書では普通円筒埴輪・朝顔形埴輪35点、形象埴輪7点、その他の遺物3点を掲載した。埴輪については、反転復元が可能なもののほか、口縁や突帯の形状にバリエーションが認められるものは小片でも掲載するように努めた。なお、全体的に小片が多いため、円筒埴輪については同一個体を重複して掲載している可能性がある。

出土状況 周濠埋土の第14層を中心に、周濠内全体から出土が認められるが、その分布状況には多少の粗密がある（第12図）。発掘調査では、土層観察用に設定した5か所の畔を境に周濠範囲を6区画（A～F区）に分けて調査を実施しており、特に埴輪が集中するのはA・B区である。E区については、部分的に上層理土が周濠底面まで及んでおり、少量の埴輪片と同一レベルで近世瓦や小礫、奈良時代の須恵器などが出土している。周濠埋没後のいずれかの時期に何らかの掘削行為が行われたものと考えられる。それ以外の区画から出土した埴輪は、すべて周濠内の墳丘寄りから中央付近にかけて出土しており、墳丘上から転落した様子を留めているといえる。

普通円筒埴輪・朝顔形埴輪（第13～15図、表2・3、写真66～69） 今回の調査で出土した埴輪片の大部分は普通円筒埴輪の破片と考えられ、そのうちの一部に朝顔形埴輪の可能性があるものが少量含まれている。

1・2は、同一個体と考えられる円筒埴輪の口縁部～胴部及び底部である。主にA区から出土した破片群で、2の一部にB区出土破片が2点接合する。1・2は直接接合しないものの、図上復元から器高60.2cmの3条4段構成と考えられ、口縁部径34.1cm、底部径23.4cmを測る。底部から1段目突帯までの高さは18.7cm、口縁から3段目突帯までの高さは12.6cm、突帯間の距離は14.4cmである。透孔は、歪な円形のものが3段目に1か所確認でき、それ以外は欠損のため不明である。口縁部



第12図 神納塚古墳 遺物分布図

はやや外反し、口縁内側は僅かに窪んでいる。外面調整は、口縁部のヨコナデ以外はタテハケによつて調整されている。内面はナナメハケされ、突帯貼付時のユビオサエの痕跡が認められる。1・2とも、外面の一部に黒斑が確認できる。突帯は、3条目のみ残存しており、断面形はやや上方に開く台形をしている。側辺はやや窪んでいる。突帯の剥離した部分を観察すると、突帯間隔設定技法として幅約0.7cmの凹線が確認できる。

3～13は、円筒埴輪の口縁部を中心とした破片資料である。

3は、主にE区から出土した破片群で、1点のみF区出土破片が接合している。口縁部～胴部の破片で、図上での復元による口縁部径は36.2cm、口縁から突帯までの高さは12.8cmを測る。胴部に円形の透孔の端部が僅かに確認できる。口縁部は外側に折返しており、端部を上に摘みあげている。外面調整は、タテハケ後、2次調整にヨコハケが施され、内面はタテハケで調整されている。外面の一部には黒斑が確認できる。透孔の5cmに断面台形の突帯が廻っている。

4は、F区から出土したものである。口縁部の破片で、図上での復元による口縁部径は39.6cmを測る。口縁部は外側に折返しており、端部を上に摘みあげている。外面は、タテハケ後、粗いヨコナデがされ、一部にヘラ描きによる沈線が3条施されている。また、口縁端面には細い線刻が認められる。内面は磨滅が著しいが、ナナメハケやユビオサエの痕跡が観察できる。外面の一部には黒斑が確認できる。

5～9は、口縁部の小片である。5・8・9はB区から、7はD区から出土している。6はC・D区の境付近から出土しており、第Ⅰ章第2節で触れた神納塚古墳発見のきっかけとなった破片資料である。それぞれ口縁形状に違いがあり、5はほぼ直立て側辺に縁をつくるもの、6は外反して側辺に縁をつくるもの、7はほぼ直立て端面を平坦につくるもの、8は外反して端部を下へやや拡張するものである。9は、表面が剥離しているものの、外反して側辺に縁をつくるものか、端部を丸くおさめるものと考えられる。口縁付近の調整はいずれもヨコナデで、それ以下の部分は内外面ともタテハケを主体としている。7の外面全体、8の口縁端部に黒斑が確認できる。

10は、A区から出土したものである。口縁部～胴部の破片で、図上での復元による口縁部径は34.1cm、口縁から突帯までの高さは13.9cm、突帯間の距離は14.1cmを測る。胴部に径5.8cmの円形の透孔が1か所確認でき、それ以外は欠損のため不明である。口縁部はやや外反しており、上端部に面をつくっている。内外面ともに調整はタテハケで、外面の一部に黒斑が確認できる。透孔の端部から4.8cm上と4.0cm下にそれぞれ突帯が廻っている。突帯の断面はやや上に傾く台形で、側辺はやや窪んでいる。

11は、D区から出土したものである。口縁部の破片で、図上での復元による口縁部径は33.4cmを測る。口縁部は僅かに外反し、端面を平坦につくっている。外面調整はタテハケ、内面はナナメハケと粗いヨコナデが確認できる。内面の一部には黒斑が確認できる。

12は、C区から出土した破片資料である。口縁部の破片で、図上での復元による口縁部径は31.5cmを測る。口縁部は外反し、側辺に縁をつくっている。外面調整はヨコハケで、口縁付近は内外面ともヨコナデされている。内面はナナメハケで調整されている。内外面ともに黒斑が確認できる。

13は、C区から出土したものである。口縁部の破片で、図上での復元による口縁部径は34.8cmを測る。口縁部は外反し、端部を上に摘みあげている。口縁付近はヨコナデされ、外面調整はタテハケが僅かに確認できる。内面は磨滅が著しく調整は不明である。外面の一部に黒斑が確認できる。

14～35は、円筒埴輪胴部の破片である。

14は、D区から出土したものである。図上での復元では胴部径26.4cmを測り、突帯1条と縦に並

ぶ2か所の透孔が確認できる。突帯は、磨滅のため側辺が不明瞭なもの、断面形状は山形をしている。透孔は円形で、突帯を挟んで2か所が縦に並ぶが、その並びは少しずれている。また、上の透孔は突帯中央から5.4cm上に位置し、下の透孔は突帯中央から2.4cm下に位置しており、突帯間の上寄りに穿孔されていることがわかる。器面調整は、内外面ともタテハケである。

15～22・28・29は突帯の残る胴部の小片である。17・18・21・22はB区から、15・19・28・29はC区から、16・20はD区から出土している。突帯の断面形状にはいくつかのバリエーションがあり、15・16・19・20は台形、17・18は方形、21・22・28・29は側辺上端を摘みあげたような形状をしている。断面台形のもののうち、20は幅がやや狭く、突出はやや低く、胴部の器壁も他のものより薄い。器面の調整は、外面はいずれもタテハケで、内面にはタテやナナメのハケ、突帯貼付時のナデなどが観察できる。16・18・22の外面には黒斑が確認できる。

23は、F区から出土したものである。図上での復元では胴部径32.7cmを測り、突帯2条と透孔3か所が確認できる。突帯間の距離は14.4cmで、断面の形状は、磨滅のため側辺が不明瞭なものの側辺上端を摘みあげた形をしている。2条の突帯のうち、上の突帯は大部分が剝離しており、剝離した部分に突帯間隔設定技法として幅約1.0cmの凹線が確認できる。3つの透孔はいずれも小ぶりな円形で、中央の段に2つ、その下段に1つ確認できる。中央の段の2か所は対向せず、欠損している場所に3か所目が想定できるような配置である。中段と下段の孔の配置は食い違となるが、こちらも90°食い違うわけではなく、また中段の2穴の中間に下段の孔が配置されているわけでもなく、やや不規則な配置となっている。器面調整は、内外面ともタテハケである。

24は、C区から出土したものである。図上での復元では胴部径34.1cmを測り、突帯1条が確認できる。突帯の断面形は、やや上に開く台形をしている。胴部外面の調整はタテハケで、内面は磨滅のため不明であるが、突帯を貼り付けた際のユビオサエの痕跡が確認できる。外面の一部には黒斑が確認できる。

25は、B区から出土したものである。図上での復元では胴部径33.1cmを測り、突帯1条が確認できる。突帯の断面形は方形をしている。胴部外面の調整はタテハケで、内面はナナメハケされ、突帯貼付時のユビナデの痕跡が認められる。

26は、A区から出土した破片である。図上での復元では胴部径31.2cmを測り、円形の透孔の一部が確認できる。透孔は径約5.8cmと推測される。胴部外面はタテハケ、内面はナナメハケされている。

27は、D区から出土したものである。図上での復元では胴部径32.4cmを測り、突帯1条が確認できる。突帯の断面形は、突出の低い台形をしている。胴部外面の調整はタテハケ、内面はナナメハケされ、突帯貼付時のユビオサエの痕跡が認められる。外面の一部には黒斑が確認できる。

30は、D区から出土した円形の透孔の一部が確認できる破片である。胴部外面の調整はタテハケ、内面はナナメハケされている。26に比べて器厚が薄く、透孔の径も小さい。

31は、A区から出土した破片が接合したものである。突帯が剝離した部分の胴部破片で、突帯間隔設定技法として幅約0.7cmの凹線が確認できる。胴部の器面調整は、内外面ともタテハケされている。調整の入れ方や焼成後の色調などが10と良く似ている。

32・33は、外面に線刻が認められる破片である。32はB区、33はC区から出土している。32は、タテハケされた器面に2条の線刻が弧状に刻まれている。内面は磨滅が著しいものの、不規則な斜め方向のハケが認められる。33は、器面に2条の細い線刻が刻まれている。内外面とも磨滅が著しいが、外面はヨコハケ、内面はタテハケ後ヨコハケの調整が僅かに確認できる。

34は、E・F区周辺の表土掘削中に出土した破片である。外面調整は、タテハケ後ヨコハケされ

ており、内面は磨滅のため調整不明である。外面全体に黒斑が確認できる。

35は、C区から出土した破片である。全体的に丸みのある器形をしていることから、朝顔形埴輪の頸部・肩部と判断した。外面の上端に強いヨコナデがみられ、突帯貼付時のものと考えられる。それ以外の外面はタテハケで調整され、内面は縦方向のユビナデが明瞭に確認できる。

形象埴輪（第16図、表3、写真69・70） A区の調査において、家形埴輪を中心に7点の破片資料が出土している。それ以外の地区では形象埴輪は出土していない。

36・37は、家形埴輪の屋根部分である。

36は切妻造の妻側端部とみられ、破風板の頂部は欠損している。屋根上には細い突帯が巡り、突帯が剥離した部分には、突帯を貼り付ける前にガイドラインとして引いたと考えられる2条の沈線が確認できる。また、細い突帯に囲まれた内側には、屋根の短軸方向に沿って別の突帯が剥離した痕跡が認められるが、この剥離部分には沈線は認められない。屋根の表面は板ナデ調整されており、網代等の表現は確認できない。妻側の外面をみると、軒裏の部分に棟木が貼付されていた痕跡が確認できる。接合部周辺には強いハケが多く方向に施されている。屋根の内面側は、ハケやユビオサエ、ナデの痕跡が残り、粗い仕上げとなっている。

37は同じく切妻屋根の端部であるが、屋根の角度が急斜であることや棟に鰐飾りが付くと考えられることから、入母屋造の上屋根端部と推定される。屋根上には妻側端部に破風板の剥離痕跡が残り、棟には鰐飾りの土台部分が剥離した痕跡が確認できる。棟の剥離部分には斜め方向の刻みが多数認められる。出土した破片の軒側部分には3mmほどの段差が認められ、棟覆として屋根頂部を薄い板状の粘土で覆っていることが分かる。鰐飾りの痕跡はこの棟覆上で確認され、棟覆の表面は板ナデ調整されている。棟覆以外の屋根表面は、残存部分が僅かであるため網代表現等の有無は判断できない。妻側の端面をみると、多方向に施された刻みが確認でき、棟木が貼付されていたものと考えられる。磨滅のため接合部は僅かであるが、後述する40の棟木が接合する可能性が高い。内面をみると、左右の器壁に筋状の刻みが複数確認でき、板状の棟木が貼り付けられていたものと考えられる。こちらも接合部が明瞭ではないが、後述する39の板状の棟木が接合する可能性が高い。また、筋状の刻みが途切れた端部付近には粘土板の剥離痕跡が認められ、妻壁が貼り付けられていたものと考えられる。この部分には、やはり接合部が明瞭ではないものの、後述する38の板状の壁が接合する可能性が高い。

38～40は、家形埴輪の棟木や妻壁部分である。39・40は37の破片群と同じ場所から、38はその破片群に隣接する場所から出土しており、いずれも37に接合する可能性が高い。

38は入母屋造家形埴輪の上屋根にとりつく妻壁と考えられる。左右両端面に屋根内面との接合痕跡が認められる。壁の外側は丁寧にナデ仕上げされ、内面側はユビナデの凹凸が残る粗い仕上げとなっている。上面は欠損もあるが、両端に板状の部材を受けるような角が認められるため、棟木を模した部材の末端がこの部分で納まるような構造になっているものと解釈できる。

39は家形埴輪の棟木部材の破片と考えられる。屋根の外側に突出する形で貼付される先端部ではなく、棟の裏に貼付され、妻壁上部と接合する末端部の部材と考えられる。家形埴輪が完成した後、外から見えなくなる上面側はユビナデやユビオサエの痕跡が残る粗い仕上げとなっており、下から覗き込むことで目視可能な下面側は、板ナデによる丁寧な仕上げが施されている。両側面には、筋状の粘土の盛り上がりが確認でき、屋根の内面に接合した際に、屋根側に施された刻みが凹凸として転写されたものと考えられる。断面形は、両側面が屋根の傾斜に合わせて上方に傾いていることから低い蒲鉾状をしている。上面にはがれの痕跡等が認められないことから、この部材と棟の間にはわずかな

空間がある中空のつくりであったと考えられる。妻壁と接合していたと考えられる末端部は、下面側はしっかりととした角を作るが、それ以外ははみ出た粘土を指で軽くまとめたのみで未調整である。破断面の観察から、この部材は板状の粘土を上下2枚で貼り合わせてることがわかる。

40は家形埴輪の棟木先端部である。下部の粘土板がはがれているが、木口面は半円形をしている。表面に線刻等は認められない。屋根との接合部分には粘土の盛り上がりがみられ、屋根側に施された刻みが凹凸として転写されたものと考えられる。木口の内面は中空となっている。棟に沿って板状の棟木が続き、同じ場所から出土した39と同一個体と考えられるが、間が欠損しているため接合しない。

41・42は、小片のため詳細不明の形象埴輪破片である。A区出土だが、他の5点から少し離れた場所から出土している。

41は、直線的に続く突帯の破片である。家形埴輪の据周突帯の可能性がある。表面は丁寧にナデ調整され、裏面は貼り付けた際に転写したものと考えられる本体側のハケ痕跡がみられる。

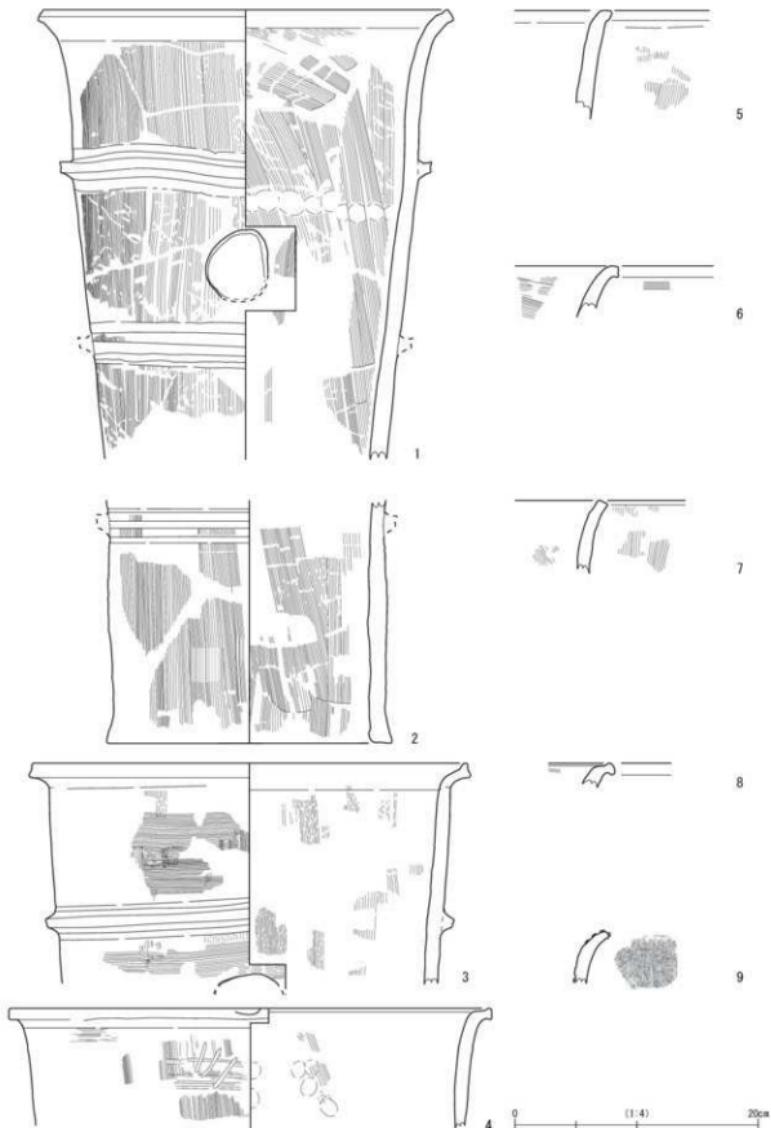
42は、表面に「く」字状に曲がる突帯が貼り付けられ、右側面には明瞭なくびれを持つ破片資料である。入母屋造家形埴輪の上屋根と下屋根の接合部の可能性がある。各表面は板ナデ等で丁寧に調整されている。

その他の遺物（第17図、表3、写真70） 周濠埋土の下層（第14層）からは埴輪のみが出土するのに対し、埋土の上層や古墳を壊している擾乱からは、埴輪のほかに神納塚古墳と時期を異にする遺物が若干出土している。

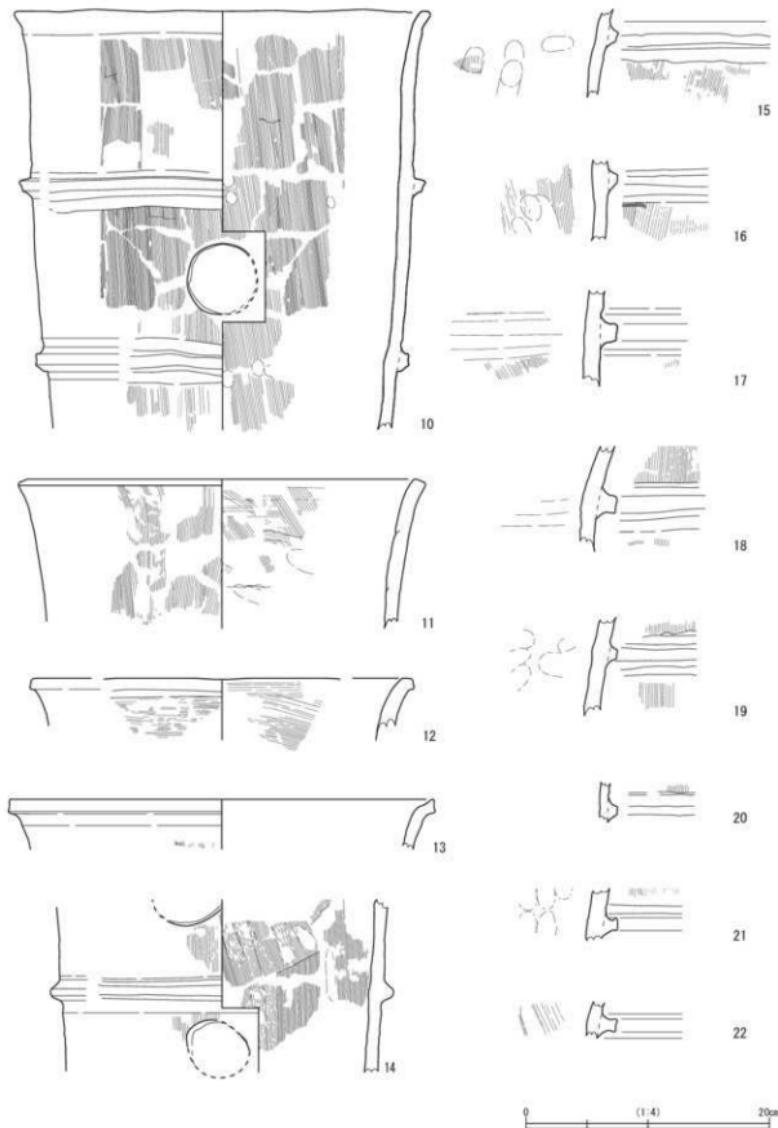
43は、E区から出土した須恵器である。E区は、「出土状況」の項で述べたとおり、周濠埋没後に何らかの掘削行為があったらしく、近世瓦や多くの礫が埴輪と混在して出土しており、43の須恵器も近世瓦と共に共伴して出土したものである。杯蓋の天井部破片で、平坦な天井部に擬宝珠形のつまみを持つ。天井部外面は、回転ヘラ切り後、粗い回転ナデで仕上げられている。内面は、丹念なナデにより平滑である。8世紀後半頃の製品と考えられる。

44は、B区上層から出土したサヌカイト製の剝片である。表面は風化が著しく剥離面の観察は困難である。上部と右側縁は欠損しており、全体の形状は不明である。背面の縁辺に微細な剥離が認められ、二次加工剝片として使用された可能性がある。

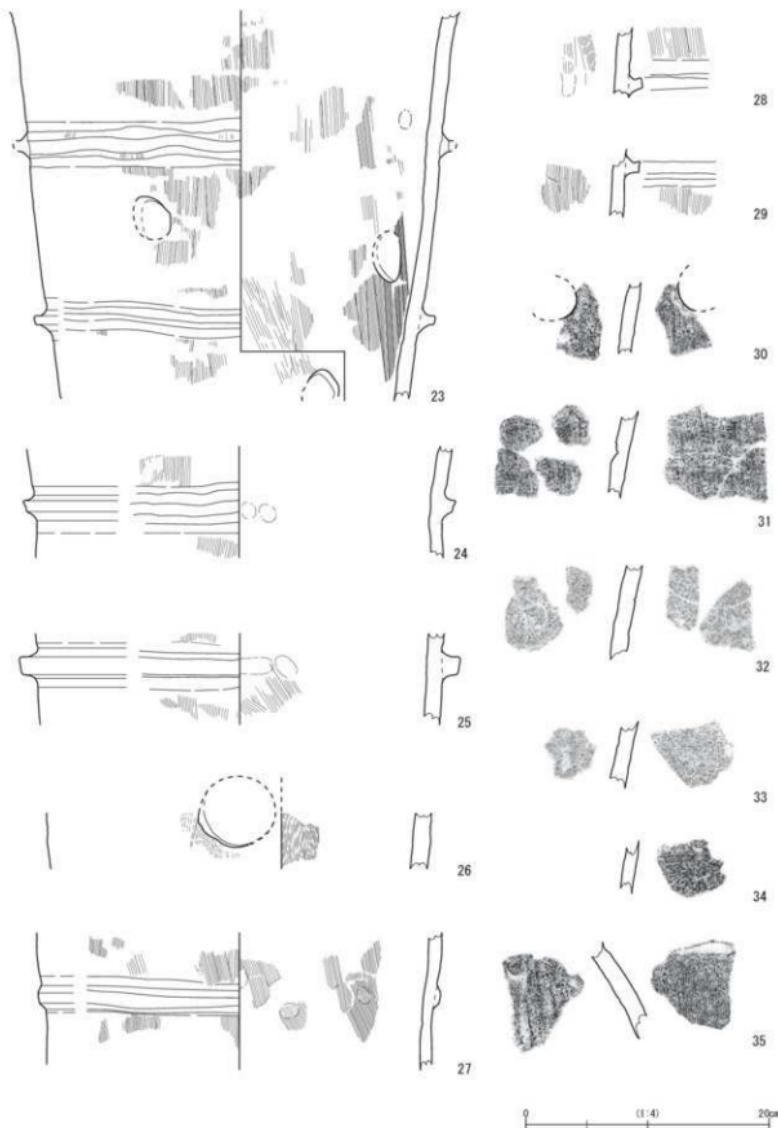
45は、A区上層から出土した花崗岩製の磨製石斧である。横断面は楕円形をしており、大型蛤刃石斧の形状に類似するが、上端部や刃部となる下端部は平坦である。刃部には、使用の結果によると考えられる欠損が複数認められる。



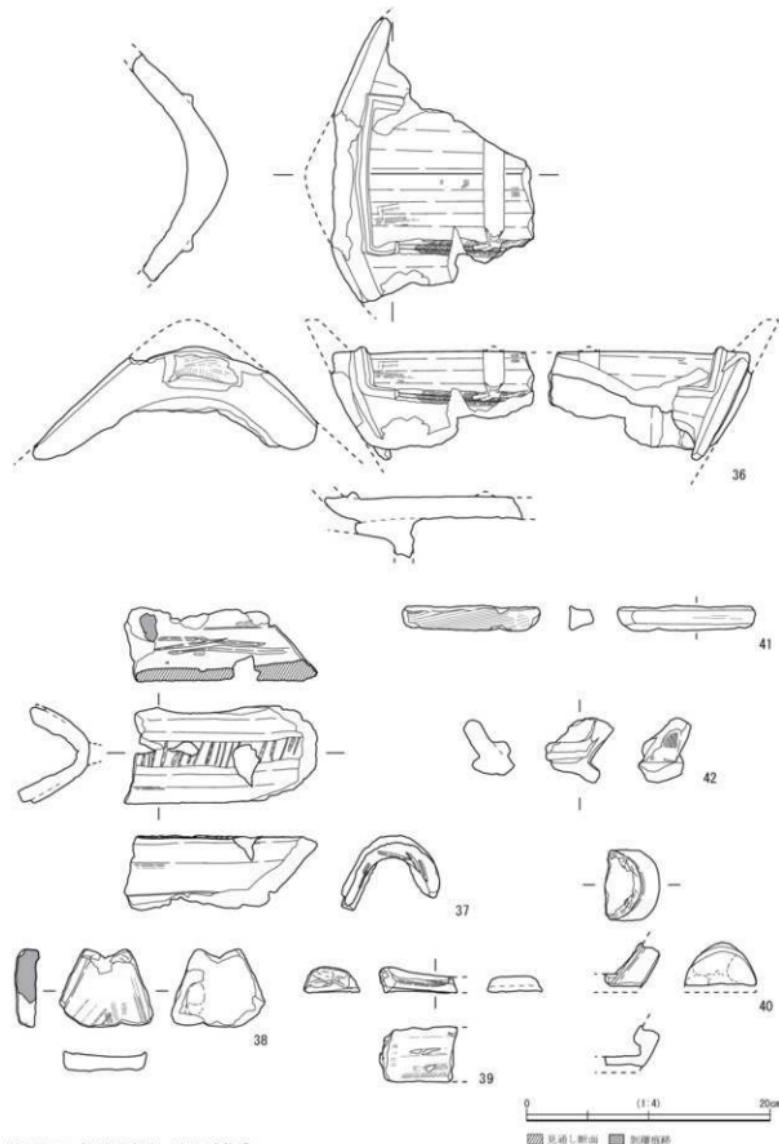
第13図 神納塚古墳 出土遺物①



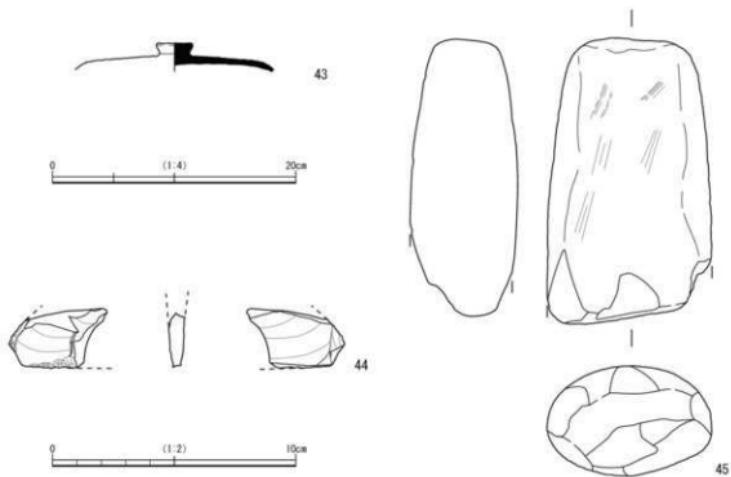
第14図 神納塚古墳 出土遺物②



第15図 神納塚古墳 出土遺物③



第16図 神納塚古墳 出土遺物④



第17図 神納塚古墳 出土遺物⑤

報告 番号	出土遺構等	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調（外） 色調（内）	胎土	備考
				様 長さ	幅	高さ	外面	内面			
1	周濠A区	円筒	口縁部 ～胴部	口径 ＊34.1	> 36.8 突帯間隔 ＊14.4	タテハケ	タテハケ	明褐色 橙色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む	2と同一個体	
2	周濠A区	円筒	底部	底径 23.4	> 19.9 底部高 ＊18.7	タテハケ	タテハケ	黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む	1と同一個体	
3	周濠E区	円筒	口縁部 ～胴部	口径 ＊36.2	> 18.1 最上段高 12.8	タテハケ ヨコハケ	タテハケ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 4 mm の砂粒を 含む		
4	周濠F区	円筒	口縁部	口径 ＊39.6cm	> 10.0	タテハケ ヨコハケ	タテハケ	明黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 4 mm の砂粒を 含む	外間に擦剝あり	
5	周濠B区	円筒	口縁部		> 8.9	タテハケ ナデ		明黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む		
6	周濠C・D区	円筒	口縁部		> 4.2	ヨコハケ	ヨコハケ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 多量含む		
7	周濠D区	円筒	口縁部		> 6.0	タテハケ	タテハケ	黒褐色明 黄褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 多量含む		
8	周濠B区	円筒	口縁部		> 2.0			明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 多量含む		
9	周濠B区	円筒	口縁部		> 4.2	タテハケ		黄褐色黄橙色	φ 1 mm の砂粒を多量 含む		
10	周濠A区	円筒	口縁部 ～胴部	口径 ＊34.1	> 34.2 突帯間隔 14.1	タテハケ	タテハケ	明褐色 明褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む	33と同一個体の可 能性あり	
11	周濠D区	円筒	口縁部	口径 ＊33.4	> 12.2	タテハケ	タテハケ ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	φ 1 ~ 3 mm の砂粒を 含む		
12	周濠C区	円筒	口縁部	口径 ＊31.5	> 5.1	ヨコハケ	ヨコハケ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 多量含む		
13	周濠C区	円筒	口縁部	口径 ＊34.8	> 4.1	タテハケ?		明黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 多量含む		
14	周濠D区	円筒	胴部	胴径 ＊26.4	> 14.1	タテハケ	タテハケ ユビナデ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 含む		
15	周濠C区	円筒	胴部		> 7.2	タテハケ	タテハケ ナデ	明黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む		
16	周濠D区	円筒	胴部		> 6.6	タテハケ	タテハケ ナデ	明黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 3 mm の砂粒を 多量含む		
17	周濠B区	円筒	胴部		> 7.9	タテハケ	タテハケ ヨコナデ	黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む	26と同一個体の可 能性あり	
18	周濠B区	円筒	胴部		> 8.6	タテハケ	ヨコナデ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 3 mm の砂粒を 含む		
19	周濠C区	円筒	胴部		> 8.1	タテハケ	ナデ	黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む		
20	周濠D区	円筒	胴部		> 3.3	タテハケ		明黄褐色 にぶい黄褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 多量含む		
21	周濠B区	円筒	胴部		> 4.2	タテハケ	ユビナデ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 3 mm の砂粒を 含む		
22	周濠B区	円筒	胴部		> 3.0		タテハケ ナデ	灰オリーブ色 黄色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む		
23	周濠F区	円筒	胴部	胴径 ＊32.7	> 31.8 突帯間隔 14.4	タテハケ	タテハケ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 4 mm の砂粒を 多量含む		

表2 神納塚古墳遺物観察表(1)

報告 番号	出土遺構等	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調（外） 色調（内）	胎土	備考
				様 長さ	幅	高さ	外面	内面			
24	周濠C区	円筒	胴部	胴径 ＊34.1		> 9.1	タテハケ	ヨコナデ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む	
25	周濠B区	円筒	胴部	胴径 ＊33.1		> 7.5	タテハケ	タテハケ ヨコナデ	明黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む	
26	周濠A区	円筒	胴部	胴径 ＊31.2		> 4.6	タテハケ	タテハケ	明黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 3 mm の砂粒を 含む	
27	周濠D区	円筒	胴部	胴径 ＊32.4		> 11.3	タテハケ	タテハケ ユビナデ	明黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む	
28	周濠C区	円筒	胴部			> 5.7	タテハケ	タテハケ ナデ	黄褐色 褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 多量含む	
29	周濠C区	円筒	胴部			> 5.6	タテハケ	タテハケ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む	
30	周濠D区	円筒	胴部			> 5.9	タテハケ	タテハケ	明褐色 明褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 少量含む	
31	周濠A区	円筒	胴部			> 7.1	タテハケ	タテハケ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 多量含む	10と同一個体の 可能性あり
32	周濠B区	円筒	胴部			> 7.6	タテハケ	タテハケ ナデ	黄褐色 黄褐色	φ 1 mm の砂粒を多量 含む	外に線刻あり
33	周濠C区	円筒	胴部			> 5.5	ヨコハケ?	タテハケ ヨコハケ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 3 mm の砂粒を 多量含む	外に線刻あり
34	周濠E・F区	円筒	胴部			> 4.3	タテハケ ヨコハケ		黄褐色 浅黄色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 多量含む	
35	周濠C区	朝顔 ～肩部				> 7.9	タテハケ	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 多量含む	
36	周濠A区	家	屋根	> 16.6	> 23.3	> 9.2	ハケ ナデ	ハケ ナデ	橙色 明褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 含む	安帶駄付け前に 2条の沈継あり
37	周濠A区	家	屋根	> 15.8	> 8.0	> 6.1	ハケ ナデ	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 5 mm の砂粒を 多量含む	頭部剥離部分に複数 の割み目あり 40・41・42と同一 個体の可能性あり
38	周濠A区	家	屋根		> 7.6	> 6.3	ハケ ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 3 mm の砂粒を 多量含む	39・41・42と同一 個体の可能性あり
39	周濠A区	家	屋根	> 6.3	> 4.5	> 2.1	ハケ ナデ	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 3 mm の砂粒を 多量含む	39・40・42と同一 個体の可能性あり
40	周濠A区	家	屋根	> 4.5	> 5.8	> 3.5	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	φ 1 ~ 3 mm の砂粒を 含む	39・40・41と同一 個体の可能性あり
41	周濠A区	家	突斯	> 11.3	> 2.1		ナデ		にぶい黄褐色	φ 1 ~ 2 mm の砂粒を 含む	
42	周濠A区	不明		> 5.5	> 4.3	> 5.3	ハケ ナデ		黄褐色 明黄褐色	φ 1 ~ 3 mm の砂粒を 多量含む	
43	周濠E区	須恵器	杯蓋			> 2.3	回転ヘラ 切り後、 回転ナデ				獨宝珠形つま振り 付け
44	周濠B区	石器	銅片	> 4.0	> 2.4	厚さ > 0.7			重量 7.5 g	石質 サスカイト	
45	周濠A区	石器	石斧	11.7	6.7	厚さ 4.4			重量 570.5 g	石質 花崗岩	大型蛤刃石斧か 刀部欠損

表3 神納塚古墳遺物観察表(2)

第Ⅲ章 広沢山遺跡

第1節 概要

広沢山遺跡は、事前の試掘調査の結果から古墳時代～平安時代の集落跡として新規に登録した遺跡であり、今回が初めての発掘調査となる。試掘調査では、遺構の密度は希薄で、遺物の出土量也非常に少なく、この傾向は本発掘調査においても同様であった。今回の本発掘調査では、神納塚古墳を含めて合計1,930 m²の調査を行った結果、検出した遺構は神納塚古墳を除くと合計42基（第9図）、古墳からの出土品を除いた遺物量は、遺物収納コンテナ3箱分に過ぎなかった。

遺構42基の内訳は、掘立柱建物跡1棟、土坑17基、溝状遺構1条、ピット23基である。このうち本書では、掘立柱建物跡1棟、土坑3基、溝状遺構1条を選定し、第2節において詳述する。

出土した遺物は、大部分が上記で選定した遺構から出土したものであるが、土坑1以外は各遺構とも出土量が非常に少ない。このうち本書では、図化可能な土師器7点、須恵器1点、石器2点を抽出し、第3節において詳述する。

第2節 調査の成果

■掘立柱建物1（第18図、写真16・38～47）

位 置：合計20基の柱穴（P1～P20）で構成される掘立柱建物跡である。調査区中央付近にあたるM6、N6・7、O6・7、P6・7グリッドに位置している。柱穴P2・3・4・13は、重複する他の土坑やピットを切っている。P17は、重複する他のピットに切られている。遺構の南西端付近とP2の一部は擾乱に壊され、遺構の北東端は調査区外へ及んでいる。

遺構確認面の高さは標高28.7～28.8mで、現地表面から約0.3m下に位置する。桁行を基準とした建物方位はN-32°-Eを示す。

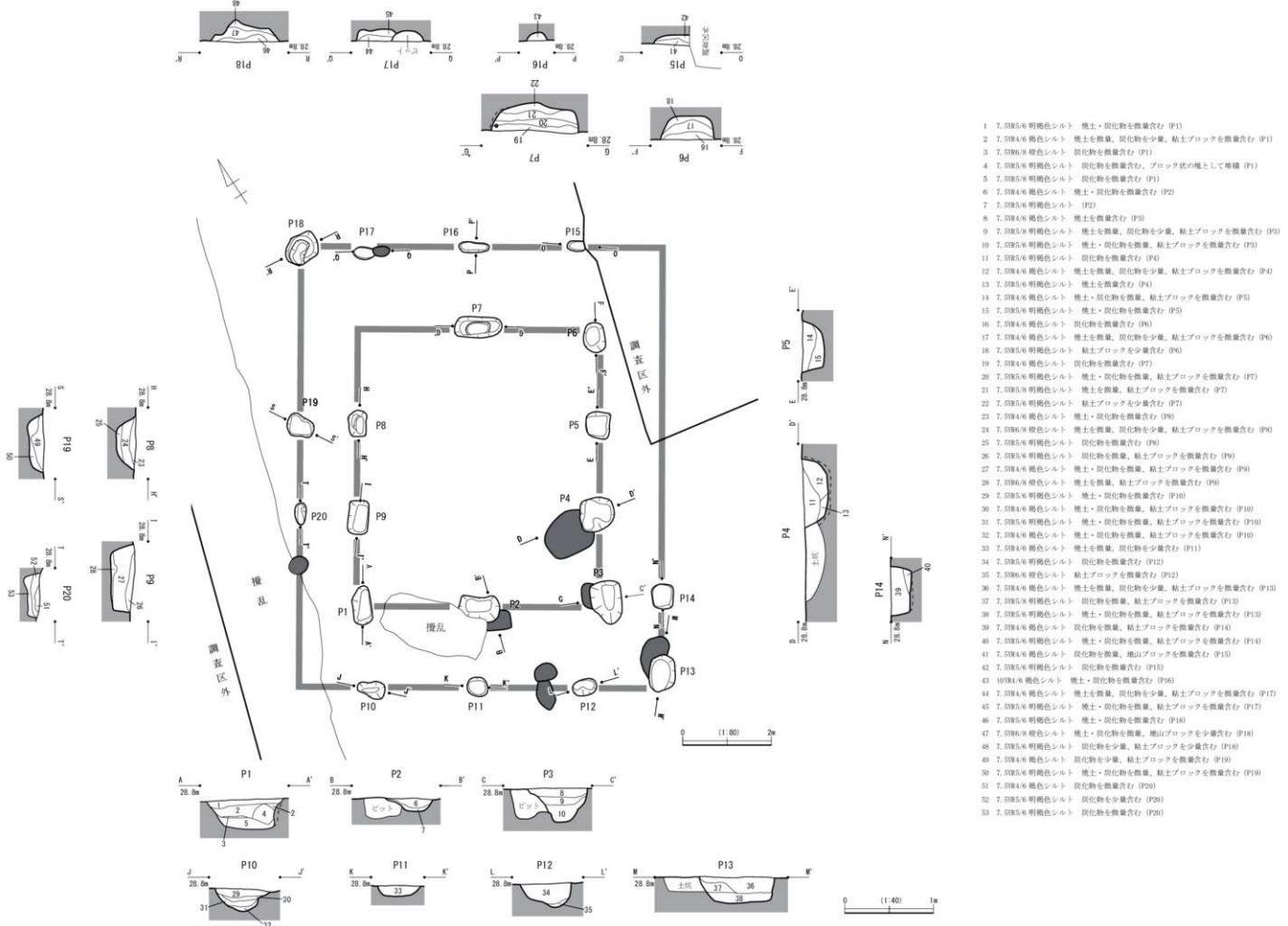
形 態：桁行3間、梁行2間の側柱建物の四方を、5間×4間の外周柱穴が巡っている。検出した20基の柱穴のうち、9基が身舎部分（P1～P9）、11基が外周柱穴にあたる（P10～P20）。

各柱穴の平面形は、身舎部分は長方形や方形で、外周柱穴は不整円形をしている。断面形は四字状のものが多く、ほかにU字状のものや外側へ緩やかに開くものなどがある。底面は、平坦なものや浅く窪むものがある。すべての柱穴で柱痕跡は確認できなかった。

外周柱穴の配置は、一部擾乱によって壊されたり、調査区外に及んでいるものがあるが、建物の周囲全体を巡っていたものと考えられ、身舎部分の柱穴位置の延長線上に対応する場所と、四隅に配置されている。調査区外の部分や擾乱によって壊されたものを復元すると合計18本となり、調査ではこのうち11基の柱穴を検出した。

なお、身舎部分と外周柱穴の復元配置からすると、身舎部分の北側隅柱と外周柱穴2基が存在したはずだが、発掘調査で検出することができなかった。今回調査地は、全体的に近代以降の機械系油を含む擾乱やシミが多いことから、近代以降の開発によってすでに失われていたものと考えられる。

規 模：建物全体の規模は、身舎部分で6.0m×5.5mの33m²、外周柱穴部分を含むと9.8m×8.2mの80.36m²となる。各柱穴の中心を基準とした柱間は、身舎の桁行では2.0m、梁行では2.6～2.9



第18図 広沢山遺跡 捩立柱建物1

mで、外周柱穴の桁側では2.0 m、梁側では2.4 mを基本としている。ただし、四隅の隅柱との柱間だけは1.5～1.8 mと狭くなっている。

各柱穴の規模は、身舎部分では長軸0.6～1.0 m、短軸0.4～0.8 m、深さ0.14～0.38 mで、外周柱穴では長軸0.4～0.8 m、短軸0.2～0.6 m、深さ0.09～0.29 mを測る。おおむね外周柱穴が身舎部分の柱穴に比べ小規模になっている。底面での標高を比較すると、身舎部分は28.31～28.51 m、外周柱穴は28.42～28.61 mで、全体的に外周柱穴が10 cmほど浅いことがわかる。

土 層：P1から順に合計53層に分層したが、同質の埋土が堆積している例も多い。いずれの柱穴も柱痕跡が確認されなかったことから、建物廃絶後に柱の抜き取りや掘り返しを伴う解体作業が行われたものと考えられ、どの柱穴も似通った土層で埋没していることからもそのことが裏付けられる。

出土遺物：どの柱穴からも遺物は出土しなかった。

遺構時期：遺物が出土していないため時期の決定は困難であるが、建物方位が後述する溝1の主軸と類似することや、東側5 mに位置する神納塚古墳周濠のE区から混入品として8世紀後半頃の須恵器が出土していることなどから、奈良時代頃の建物跡と推定しておきたい。

■土坑1（第19図、写真14・15・48～51）

位 置：調査区南寄りのS4・5グリッドに位置し、神納塚古墳の西側に近接している。遺構の西侧部分全体と東側の一部を擾乱によって壊されている。神納塚古墳を含めた周辺の遺構と同様に、上面は近代以降の削平を被っているものと考えられる。

遺構確認面の高さは標高28.7 mで、現地表面から0.2 m下に位置する。長軸方向を基準とした方位はN-62°-Wを示す。東側にある神納塚古墳周濠上端との距離は1.6 mである。

形 態：遺構の西側が大きく擾乱されているものの、平面形は不整な楕円形と推測される。断面形は浅い皿状で、底面は緩やかに湾曲している。

規 模：検出した範囲での長軸は2.41 m、短軸は2.17 m、深さは0.25 mを測る。

土 層：合計4層に分層した。明褐色や褐色のシルトを主体とし、上層には炭化物片が多く含まれている。最下層にあたる第4層からは、土師器壺や高杯が複数個体出土した。

出土遺物：土師器壺・高杯、磨石、炭化物片などが出土した。詳細は第3節のとおりである。

遺構時期：出土した遺物の年代観から、遺構の時期は古墳時代中期初頭～前半頃と考えられる。

■土坑2（第20図、写真52・53）

位 置：調査区南側のX3グリッドに位置している。

遺構確認面の高さは標高28.3 mで、現地表面から0.5 m下に位置する。長軸方向を基準とした方位はN-32°-Eを示す。

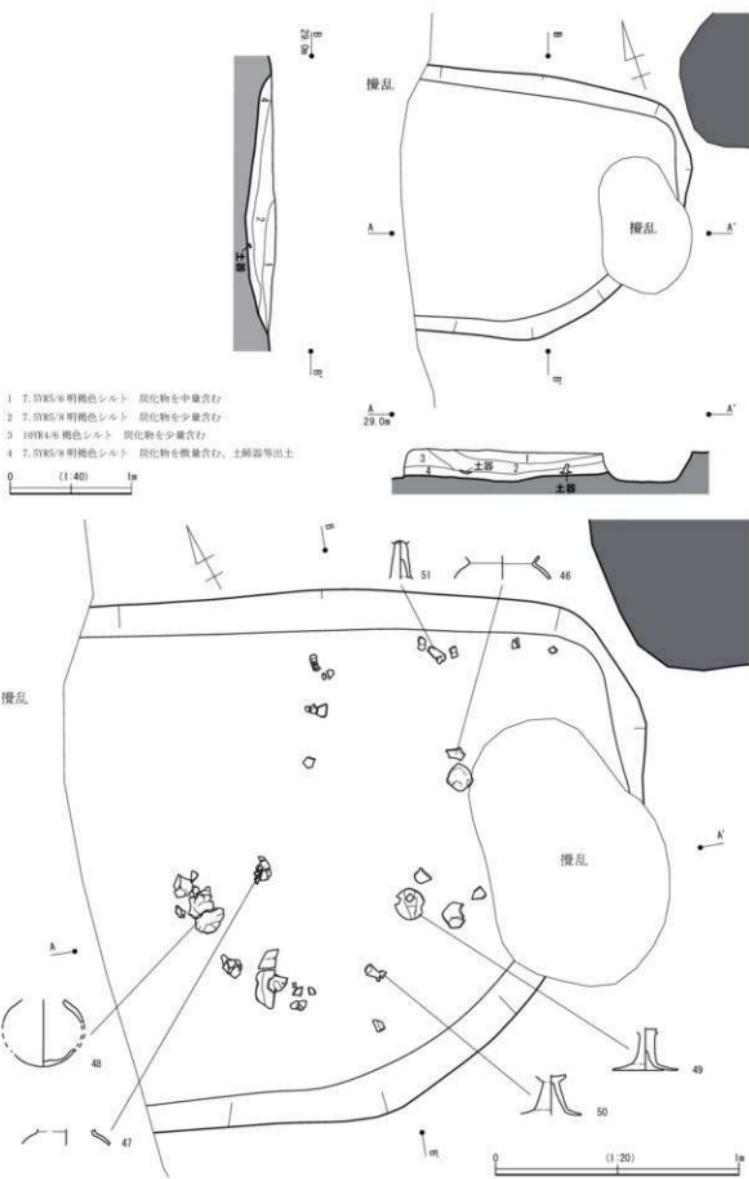
形 態：平面形は不整な楕円形を呈し、断面形は浅い皿状をしている。底面には凹凸がある。

規 模：長軸は1.38 m、短軸は0.99 m、深さは0.20 mを測る。

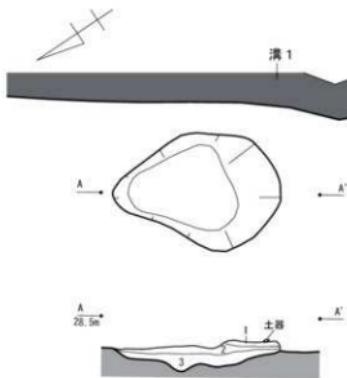
土 層：合計3層に分層した。このうち第1層は、遺構の上面に堆積した近代以降の整地層である。第2層は橙色シルトを主体とし、最下層にあたる第3層は明褐色シルトを主体としている。第2層から須恵器杯蓋が出土している。

出土遺物：須恵器杯蓋1点が出土した。詳細は第3節のとおりである。

遺構時期：出土遺物が少ないものの、遺物の年代観から遺構の時期は古墳時代後期と推定しておきたい。

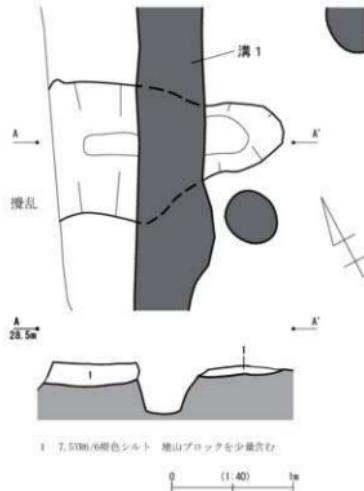


第19図 広沢山遺跡 土坑1



1 遺構上面に堆積した近代層（系本層序I-2層）
 2 T.53B6.6褐色シルト 硬化物を微量含む
 3 T.53B5.6褐色シルト 硬化物を微量、地山ブロックを少量含む

第20図 広沢山遺跡 土坑2



1 T.53B6.6褐色シルト 地山ブロックを少量含む

第21図 広沢山遺跡 土坑3

■土坑3（第21図、写真54・55）

位 置：調査区南側のY2グリッドに位置している。遺構内の東寄りを溝1が南北方向に横断しており、遺構が分断されている。西側は擾乱によって壊されている。

遺構確認面の高さは標高28.2mで、現地表面から0.6m下に位置する。長軸方向を基準とした方位はN-60°-Wを示す。

形 態：遺構の西側が擾乱されているものの、平面形は不整な楕円形を呈すると推測される。断面形は浅い皿状で、西側の底面は緩やかに湾曲している。

規 模：検出した範囲での長軸は1.90m、短軸は1.12m、深さは0.19mを測る。

土 層：橙色シルトを主体とした単層である。上面から須恵器小片や石鎚が出土した。

出土遺物：須恵器小片と石鎚が各1点出土した。詳細は第3節のとおりである。

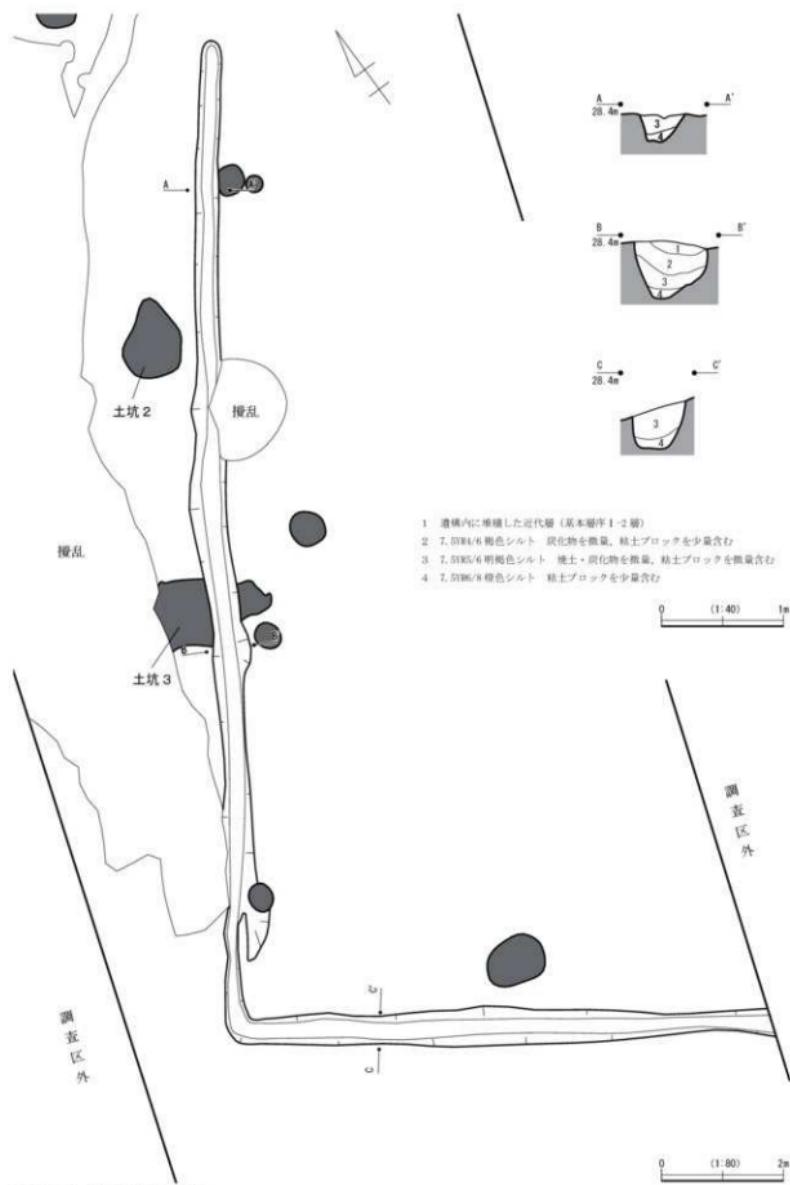
遺構時期：年代の決め手となる遺物の出土がないため、遺構の時期は不明と言わざるを得ない。

■溝1（第22図、写真17・56・57）

位 置：調査区南端のX-Y-Z-AA2-3グリッドに位置する溝状遺構である。土坑3を切っており、上端の一部は他のピット2基に切られている。また、部分的に近代以降の擾乱によって壊され、南側は削平により上端の形状が一部変形している。東側の溝の延長部分は調査区外へ及んでいる。

遺構確認面の高さは北側と南側で異なり、北側は標高28.3m、南側は標高28.0～28.2mを測る。現地表面から遺構確認面までの深さは、北側で0.5m、南側で0.6～0.8mを測る。溝は南北方向と東西方向に延びており、南北方向に延びる部分の軸方位はN-34°-E、東西方向に延びる部分の軸方位はN-55°-Wを示す。

形 態：検出した範囲での平面形は、Z2グリッドではほぼ直角に曲がるL字状を呈する。断面形は、逆台形状を呈する。底面は平坦で、外側へ向けてやや開きながら急斜に立ち上がる。



第22図 広沢山遺跡 溝1

規 模：検出した範囲での総延長は 24.8 m で、22 グリッドの屈曲点から北側方向へ 16.1 m、東側方向へ 8.7 m を測る。幅は 0.30 ~ 0.64 m、深さは 0.21 ~ 0.47 m を測る。北端部付近は、近代以降の削平の影響により徐々に浅くなり遺構は途切れているが、本来はより北側へ続いている可能性や、南側と同様に東側へ屈曲していた可能性が考えられる。

土 層：合計 4 層に分層した。このうち第 1 層は、遺構の上面に堆積した近代以降の整地層である。第 2・3 層は明褐色シルトを主体とし、最下層の第 4 層は橙色シルトを主体としている。南側の第 3 層中から須恵器壺片が出土した。

出土遺物：須恵器壺胴部の破片 1 点が出土した。外面は平行タタキされ、内面には車輪文タタキがみられる。内面に車輪文タタキのある須恵器は、上莊町白沢に所在する飛鳥 IV～平城 I 期の窯跡とされる白沢放山遺跡（白沢 6 号窯）で確認されており、関連が注目される。

遺構時期：出土遺物が 1 点のみのため詳細な時期は検討できないが、遺物の年代観から奈良時代頃と推定しておきたい。

第 3 節 出土遺物

■土坑 1 出土遺物（第 23 図、表 4、写真 15・71）

古墳時代中期初頭～前半頃の土師器壺・高杯及び磨石が出土している。壺には図示した 3 点のほか、大型品の破片がある。

46 ~ 48 は、土師器の直口壺である。46・47 は頭部、48 は底部及び頭部付近の破片である。いずれも表面の磨滅が著しく調整は不明である。

46 は焼成が堅緻で、頭部から口縁部にかけての器厚は 0.2 cm と非常に薄い。

47・48 は焼成がやや軟質で、47 は二次的に被熱している。48 の底部は丸底である。

49 ~ 51 は、土師器の高杯脚部である。いずれも中空のつくりで、透孔をもたない。いずれも表面の磨滅が著しく調整は不明である。

49 は、土坑内の底面付近から直立した状態で出土した。近くからは無縫外反形とみられる杯部破片が出土しているが、同一個体かは不明である。脚部全体が残存しており、底部の器厚は 0.2 cm と非常に薄い。50 は二次的に被熱している。

52 は、平面隅丸方形の磨石である。他の遺物と同様に土坑内の底面付近から出土した。表面全体は、使用のため滑らかになっている。肉眼観察から、石質はチャートと考えられる。

■土坑 2 出土遺物（第 23 図、表 4、写真 71）

古墳時代後期の須恵器杯蓋が出土している。

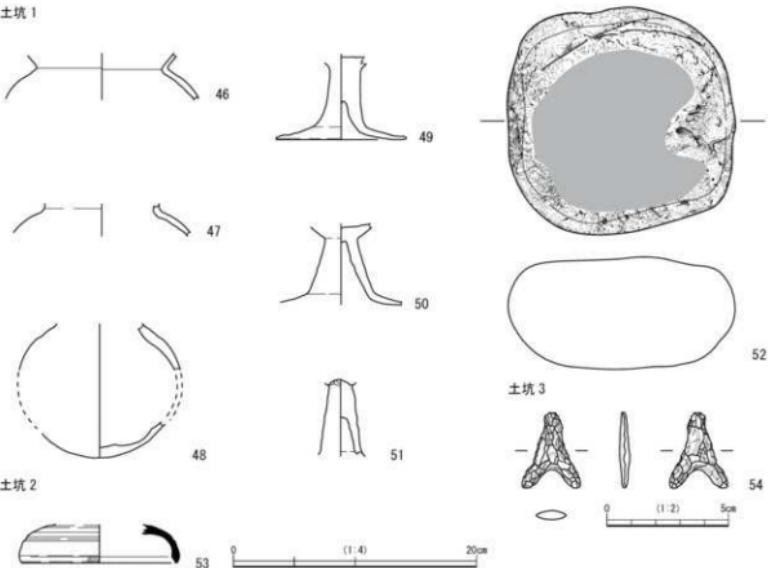
53 は蓋の口縁部破片で、天井部との境に浅い沈線が廻っている。外面の天井部は回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデされている。口縁端部には、ヨコナデ後、斜め方向の刻みが連続して施されている。内面は回転ナデされ、口縁端部に段を有する。

■土坑 3 出土遺物（第 23 図、表 4、写真 71）

绳文時代の石鏃及び時期不明の須恵器小片が出土している。

54 はサヌカイト製の石鏃である。凹基式の無茎鏃で、全体的に風化が著しく剥離の痕跡が不明瞭である。先端部に尖りがなくやや歪な形状をしており、調整が不十分な大きな剥離面などが残されていることから未成品の可能性がある。共伴した遺物と時期に隔たりがあるため混入品と考えられる。

土坑 1



第23図 広沢山遺跡 土坑1～3出土遺物

報告 番号	出土遺構等	種別	器種	法量(cm)			重量 (g)	所見
				口径	底径	器高		
46	土坑1	土師器	壺			> 3.8		内外面ともに磨滅のため調整等不明
47	土坑1	土師器	壺			> 2.7		内外面ともに磨滅のため調整等不明
48	土坑1	土師器	壺			> 10.0		内外面ともに磨滅のため調整等不明
49	土坑1	土師器	高杯		10.7	> 6.7		内外面ともに磨滅のため調整等不明
50	土坑1	土師器	高杯			> 6.6		外面：磨滅のため調整等不明 内面：ユビナデ
51	土坑1	土師器	高杯			> 6.3		内外面ともに磨滅のため調整等不明
52	土坑1	石器	磨石	長さ 9.3	幅 9.4	厚さ 4.6	696.0	石質：チャート
53	土坑2	須恵器	杯壺	* 12.6		> 3.1		外面：回転ヘラケズリ 回転ナデ 口縁部に割み目あり 内面：回転ナデ
54	土坑3	石器	石鏃	長さ 3.1	幅 2.4	厚さ 0.4	1.6	回基式石鏃 石質：サヌカイト

表4 広沢山遺跡遺物観察表

第IV章 まとめ

第1節 はじめに

今回の発掘調査では、日岡山公園再整備事業における駐車場整備工事等によって、遺跡が破壊されてしまう範囲 1,930 m²を調査した。その結果、調査中の不時の発見となった神納塚古墳の周濠と、広沢山遺跡の遺構 42 基を検出した。

神納塚古墳の調査では、第II章で述べたとおり周濠の規模や形状から、古墳の大きさを幅 6 m の周濠が巡る径 27 m の円墳と判断した。周濠の下層からは埴輪が出土し、周濠底面の一部には土橋状の高まりが認められた。一方、葺石の存在を想定できるような礫の出土は認められない。出土した埴輪の年代観から、時期は古墳時代前半期と考えられ、日岡山古墳群の前期古墳の中では最終段階に築かれた古墳と考えられる。

広沢山遺跡の調査では、第III章で述べたとおり集落遺跡にしては遺構・遺物ともに少なかったものの、古墳時代中期から奈良時代にかけての人間活動の痕跡を確かめることができた。中でも、土坑 1 からは土師器の壺や高杯が複数個体出土しており、神納塚古墳に近接し、時期的にも近いことからその性格が注目される。

本稿では、今回検出したこれらの遺構・遺物のうち、第2節において神納塚古墳出土の円筒埴輪の基本的な情報を整理した上で、日岡山古墳群の他の古墳や周辺古墳から出土又は採集された埴輪との比較を試みる。第3節では、広沢山遺跡の集落跡について若干の検討を行うことでまとめとしたい。

第2節 神納塚古墳について

出土埴輪の特徴 神納塚古墳周濠から出土した埴輪は、普通円筒埴輪、朝顔形埴輪（推定）、家形埴輪、不明形象埴輪片に大別できる。このうち、大部分を占める普通円筒埴輪について、基本的な情報を整理し、その特徴を検討してみたい。

表 5 は、本書に掲載した普通円筒埴輪 34 点を観察項目別にまとめたものである。全体の規模や形状がわかるものは、同一個体と考えられる 1・2 を図上で組み合わせたもののみで、口径 34.1 cm、底径 23.4 cm、器高 60.2 cm の 3 条 4 段構成に復元できる。底径がわかる資料はほかにないものの、口径の比較では、1 の値に近いものが多く、4 のみ 39.4 cm と少し大きい。このことから、本古墳には 1・2 と同程度の大きさのものと、それよりも大きいサイズのものという少なくとも 2 種類の規格の円筒埴輪が用いられていた可能性がある。

各部位の高さを見ると、口縁部高は 12.6 ~ 13.9 cm、突帯間隔は 14.1 ~ 14.4 cm、底部高は 2 のみの値であるが 18.7 cm を示す。資料の数が少ないため断定はできないものの、今回比較できたものはすべて突帯間隔より口縁部高がやや低く、底部高は突出して高くなっている。

口縁部の形状は、やや外反して端部に面をつくるものや折返して端部を上方に摘みあげるものなど様々であるが、大別すると外反するもの、折返すもの、直立するものの 3 種があり、外反するものが最も多い。

器面の調整は、外面 1 次調整にタテハケを施し 2 次調整を行わないものがほとんどで、一部 2 次調

表5 神納環古墳の普通円筒埴輪

整ヨコハケのものがみられる。ヨコハケの施された資料はすべて図化掲載したため、不掲載のものを含めると全体の9割以上がタテハケのみの調整である。ヨコハケには静止痕の認められるものは存在せず、ハケ原体を器面から離しながら連続的もしくは断続的にヨコハケを施している。内面の調整はタテハケかそれに準ずるナナメハケが主体である。

突帯間隔設定技法が観察できる個体は3点で、すべて凹線技法が用いられている。突帯の断面形状は、台形、方形、山形（三角形）、側辺の上端を摘みあげたものの4種に大別でき、台形のものが最も多い。突帯の突出高は、断面台形のものは大部分が0.6～1.1cmの範囲に収まり、27のみ0.4cmと低い。方形のものは1.4～1.5cmと高く、山形が0.9cm、側辺上端を摘みあげたものは1.1～1.4cmである。

透孔の形状は、確認できた7個体すべてが円形であった。直径は5.0～5.8cmを主体とし、2個体のみ4.0cmと小さい。孔の配置がわかるものは5個体あり、このうち全形のわかる1を含む3個体は上から2段目に穿孔されている。残り2個体は中段以下の配置で複数の孔を確認でき、14は上下2段に縦並びの配置、23は上下2段に食い違いの配置を示す。すべて3条4段構成の埴輪であった場合、2段目と3段目に透孔を配置するのが基本構成と言えるが、資料が少なく断定はできない。

黒斑は、小片を含め多くの個体に認められる。

ほかに、線刻の施されたものが3点ある。蟠付円筒埴輪は出土していない。

また、観察項目には含めていないが、胎土にも顕著な特徴がある。神納塚古墳出土埴輪の胎土は、形象埴輪も含めて白色の砂粒を多く含んでおり、白い粉をまぶしたような外観が肉眼でも容易に観察できる。

埴輪の出土状況をみると、周濠から出土した埴輪は、周濠全体を埋め尽くすような膨大な量ではなく、周濠内に粗密を持ちながらまばらに展開している状況である（第12図）。このことから、埴丘上での埴輪の配置は、大型前方後円墳のように隙間なく立て並べるというより方ではなく、墳頂などの限られた場所にある程度の間隔をあけて樹立されていたものと考えられる。

周辺古墳との比較 上記で抽出した神納塚古墳出土の円筒埴輪の特徴について、近隣に所在する古墳との比較を行う。比較を行う際は、時期が近く墳丘の規模や形態が類似しているものが望ましいと考えられるが、周辺に前期末頃から中期初頭の中・小型の古墳で埴輪の出土や採集が報告されている事例が存在しないため、今回は前方後円墳を主とする大型の古墳を対象とする。比較の対象とするのは、神納塚古墳と同じ日岡山古墳群からひれ墓・西大塚・北大塚古墳（すべて前方後円墳）、日岡山古墳群に後続するとされる西条古墳群から行者塚古墳（前方後円墳）・人塚古墳（造り出し付円墳または帆立貝形古墳）、行者塚古墳とほぼ同時期に成立したと考えられている加西市所在の玉丘古墳群から玉丘古墳（前方後円墳）である。

表6は、平成29（2017）年刊行の『人塚古墳』（加古川市教育委員会）に掲載した表「西条古墳群・周辺古墳出土の円筒埴輪」を基に作成したものである。発掘調査による出土品か、表面採集や部分的な確認調査による出土品かによって資料数や内容に大きな差があるが、図上での報告や実物の観察によつて確認できるものを対象とした。

日岡山古墳群は、これまで本格的な発掘調査が行われたことがなく、部分的な確認調査や表面採集において少量の埴輪が知られている程度である。円筒埴輪の情報も極めて限定的で、上記に掲げた3古墳のうちひれ墓・西大塚古墳は十分な情報が得られず、比較できそうなものは北大塚古墳のみである。北大塚古墳は、これまでの研究により日岡山古墳群で最後に築かれた前方後円墳とされている。

		発掘調査による出土品				分布・確認調査や個人による採集品		
遺跡名		神納塚古墳	行者塚古墳	人塚古墳	玉丘古墳	ひれ基古墳	西大塚古墳	北大塚古墳
口縁部	形状	直立・外反8° 外折2°	直立	直立・外折	-	-	-	-
	高さ	12.6～13.9cm	10.0～15.5cm	-	-	-	-	-
胸部	突帯間隔	14.1～14.4cm	10.0～14.0cm	12.5cm	-	-	-	-
	径	23.4cm	18.0～23.0cm 24.0～29.0cm	19.0～22.5cm 23.5～27.0cm	20.0～25.0cm 30.0cm	-	-	21.0cm
底部	高さ	18.7cm	13.5～19.5cm	12.5cm前後 16.2cm 18.6cm	12.0～15.0cm	-	-	13.4cm以上
	外面1次	タテハケ	タテハケ	タテハケ	タテハケ	タテハケ	-	タテハケ
調整	外面2次	ヨコハケ(連続?) (少量)	ヨコハケ(連続?) (少量)	ヨコハケ(連続?)	ヨコハケ(連続?)	-	-	ヨコハケ(連続?)
	内面	ハケ	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	ケズリ	ナデ	-	ナデ・ハケ
突帯	形状	方形3・台形9・ 三角形1・上端 拡張5	方形・台形	方形・台形・ 三角形	台形	台形	台形	方形・台形
	高さ	0.4～1.5cm	0.9～1.3cm	0.7～1.3cm	0.7～0.8cm	0.7cm	1.2cm	0.8～10.0cm
設定技法		問線	問線	問線	-	-	-	問線
透孔		○	□△(少量)	○	-	-	-	□○
黒斑		有	有	有	有	-	-	有

表6 神納塚古墳と周辺古墳の円筒埴輪

埴輪の内容は、外面2次調整に静止痕のないヨコハケを施すものが主体で、透孔には方形または長方形のものと円形のものが確認できる。突帯の断面形状は方形や台形のものがあり、突帯間隔設定技法として凹線が採用されている。突帯間隔や口縁部高、底部高がわかる資料は知られていない。

神納塚古墳との比較では、外面の調整に大きな違いがある。神納塚古墳では大部分が1次調整のタテハケのみであるのに対し、北大塚古墳では2次調整にヨコハケを施すのがほとんどである。突帯間隔等の規格が検討できないものの、外面調整以外はおおむね似通った様相と言える。

日岡山古墳群の東に位置する西条古墳群は、史跡整備に伴う発掘調査が行われており、多数の埴輪が出土している。盟主墳ともいえる行者塚古墳からは、外面2次調整にヨコハケを施し、円形の透孔を主体とする円筒埴輪が多数出土している。それらの中には、2次調整に静止痕のあるヨコハケ（いわゆるB種ヨコハケ）を施すものも含まれている。各部の寸法は、口縁部高10.0～15.5cm、突帯間隔10.0～14.0cm、底部高13.5～19.5cmを測る。突帯間隔設定技法として凹線が確認されている。

神納塚古墳との比較では、北大塚古墳と同様に外面の調整に大きな違いがある。また、各部の寸法において、行者塚古墳の埴輪により低い数値のものが確認できる。一方、円形の透孔を主体とすることや、透孔の配置に縱並びのものと食い違いになるものがあるなどの共通点もある。

人塚古墳の円筒埴輪は、表面が磨滅しているものが多く外面調整が判別できないものも多いが、2次調整ヨコハケを主体としていると考えられる。現在のところB種ヨコハケは確認されていない。透孔は円形で、突帯間隔設定技法には凹線が確認されている。各部の寸法は、口縁部高のわかるものはなく、突帯間隔は12.5cm、底部高は12.5cm前後に主体としつつ、ほかに16.2cm、18.6cmのものがある。

神納塚古墳との比較では、外面調整がヨコハケ主体である点に違いがあるが、透孔の形状や突帯間隔設定技法は共通している。各部の寸法では、突帯間隔・底部高とも人塚古墳の方が低くなっている。底部高18.6cmの個体が1点報告されているが、報告書において朝顔形埴輪の可能性が指摘されている。

玉丘古墳の円筒埴輪は、底部を中心とした小片が多く十分な情報とは言えないが、B種ヨコハケを主体とする埴輪が知られている。底部高は11.6～15.0cmのものと、17.2cmのものがある。突帯の

断面形状は台形で、突出の高さは1cm以下のものが中心である。

神納塚古墳と比較すると、外面調整は他の古墳と同様に大きな違いがあり、底部高や突帯の突出高については、玉丘古墳により低いものが多いと言える。このほか、伝玉丘古墳とされる円筒埴輪の中には、口縁部に幅広の突帯を貼りつけたものや、円形の透孔を持つものがあり、突帯間隔がわかる資料もある。突帯間隔は11.7～13.5cmを測り、神納塚古墳例より低くなっている。

以上の個別の比較結果から、現段階における各古墳との円筒埴輪を基準とした前後関係を検討してみたい。最も顕著な違いとなった外面調整については、古墳時代中期に盛行するB種ヨコハケの有無が問題となるが、神納塚古墳例のような3条4段構成の小型の円筒埴輪は2次調整が省略されることがしばしば報告されており、今回の比較の基準としては適当ではないと考えられる。ただし、前方後円墳に用いられた埴輪同士の比較として、B種ヨコハケが見られない北大塚古墳とB種ヨコハケを採用している行者塚・玉丘古墳との間には前後関係を認めてよさそうである。

外面調整以外で前後関係を検討する上で注目されるのが各部の寸法である。各部の寸法は前期から中期にかけて徐々に低くなることが知られている。神納塚古墳例をみると、突帯間隔が14cm代前半にまとまる傾向がみられ、これに対して比較が可能な行者塚・人塚・伝玉丘古墳例は14cm以下のものが中心で、神納塚古墳より新しい要素と言える。これは、口縁部高や底部高についても同様の傾向である。以上のことから、大まかな前後関係としては、前期的な要素が強い北大塚・神納塚古墳と中期的な要素の強い行者塚・人塚・玉丘古墳に大別できそうである。

北大塚古墳と神納塚古墳の関係については、北大塚古墳の埴輪は採集された点数が少なくこれ以上の検討は困難である。両古墳とも、古墳群中で最初に築かれたとされるひれ墓古墳から最も離れた丘陵東端部に位置しており、前期古墳の中では最終段階に築かれたことは位置関係からもほぼ間違いないと考えられ、前方後円墳の北大塚古墳が築かれた際、その従属墳として神納塚古墳がほぼ同時期に築かれた可能性も十分に考えられる。主墳と従属墳という関係でみると、『尼塚古墳』(尼塚古墳発掘調査団・加古川市教育委員会 2012)に掲載された「加古川流域の古墳編年」では、ひれ墓古墳以外の前方後円墳に小古墳が従属するという解釈が提示されており、神納塚古墳が加わることですべての対応関係が整理され、いわゆる階層構成型の古墳群としての姿が明確となる(第24図)。いずれにせよ、副葬品等を用いた多角的な検討ができる現状では前後関係についてこれ以上踏み込むことは難しそうである。

埴輪製作の面からみると、神納塚古墳の埴輪はその出土状況から埴丘を隙間なく飾るほどの量は想定できず、神納塚古墳へ供給するためだけに埴輪製作が行われたとは考えにくい。むしろ、北大塚古墳のような前方後円墳に供給するために製作された埴輪の一部が神納塚古墳へも提供されたと考える方が理解しやすい。これは、前述の主墳と従属墳という考え方を補完する見方と言えるが、この場合両者の胎土の違いが問題となる。白い粉をまぶしたような外見となる神納塚古墳出土埴輪の胎土は、北大塚古墳だけでなく今回直接資料を観察した西大塚・行者塚・人塚古墳の埴輪にも見られない特徴である。これらのことから、検討する資料の乏しい現段階では、神納塚古墳と北大塚古墳は近い時期に築かれた可能性が高いものの、埴輪を共有するほどの同時性は認められないというのが結論である。今後、北大塚古墳から多量の埴輪が出土するような機会に恵まれた際に改めて検討を試みたい。

以上のように、今回の報告では神納塚古墳を前期末頃に北大塚古墳と相前後して築かれた古墳と解釈した。また、対応する暦年代については、古墳時代の各時期に対応する暦年代の設定が研究者の間で差が大きいことを認識しながらも、仮の年代として4世紀後半～末頃の時期を与えておきたい。

	加古川下流域右岸	加古川下流域左岸	加古川中流域	淡路寺川流域
先史時代	神吉山5号墳 (複数不明) □	西条塚古墳 日岡塚古墳 勤塚古墳 弘塚古墳(縄文)	聖陵山古墳	西瀬今山1号墳 堀山3号墳(複数不明)
前期前半	藤原山古墳 高瀬山1号墳	天城山古墳 電山6号墳	西大塚古墳 南大塚古墳 北大塚古墳(全長不明)	井本山古墳
前期後半	口笠山1号墳	西大塚古墳 南大塚古墳 天城山古墳 電山6号墳	西車塚古墳 愛宕山古墳 神納塚古墳★	葉生二ツ塚古墳 奥山所在古墳 (複数不明) 木屋山古墳 (複数不明)
中期前半	天日山古墳	行者塚古墳 人塚古墳 星塚古墳	愛宕塚古墳 東地大塚古墳 宮山大塚古墳(複数・時期不明)	天豆古墳 クワニス塚古墳 小山古墳
中期後半	角光寺古墳 高瀬2号墳 (複数不明) □	西山大塚古墳	阿波山雙塚古墳●	マンジュウ古墳 佐原古墳 龜山古墳
後期	星古墳	二塚古墳	伊豆足塚古墳	

『尼塚古墳』尼塚古墳を踏査した際・加古川市教育委員会2012年より作成

第24図 加古川流域の古墳編年

第3節 広沢山遺跡について

神納塚古墳から多くの埴輪が出土したのに対し、集落遺跡として調査を実施した広沢山遺跡の範囲では、時期の異なる遺構・遺物が少量ずつ確認されたに過ぎない。本稿では、検出した遺構を時期別に分けて整理し、当該地における土地利用の変遷を考えてみたい。

今回の調査では、神納塚古墳より古い時期の遺構は検出されておらず、最も古い時期の遺構は古墳時代中期初頭から前半頃とした土坑1の時期（I期）となり、その後に古墳時代後期と判断した土坑2の時期（II期）、奈良時代頃と推定した掘立柱建物1・溝1の時期（III期）が続く。

古墳時代中期初頭から前半頃（I期）とした遺構は、土坑1のほかは時期を推定できる遺構は検出されていない。土坑1からは、土師器の大型の壺や直口壺、小型の高壺などが底面付近から複数個体出土している。埋土に炭化物が多く含まれ、土器にも2次的に被熱しているものが認められるなど、火を用いた何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。神納塚古墳が完成してから大きな時間差はないものと考えられ、古墳周濠の西側わずか1.6mの位置に軸方向を墳丘側へ向けて掘削されていることなどから、神納塚古墳に関連する祭祀の痕跡とも考えられる。しかし、これまで周濠内や墳頂での土器祭祀が報告された例はあるが（古屋2011など）、周濠の外側における事例は知られておらず、古墳との位置関係や時期的な近さのみでその性格を断定することはできない。本遺構が、造り出しなどの施設を持たない小規模古墳における祭祀の事例として考え得るのか、今回は可能性を提示するに留めておきたい。

古墳時代後期（II期）とした遺構は、土坑2のほかは時期を推定できる遺構は検出されていない。土坑2は、浅い不整縁円形を呈し、底面に不規則な細かい凹凸がみられることから植栽痕の可能性がある。この時期、日岡山古墳群では20基を数える後期古墳の存在が知られており、古墳築造の際にには相当数の人々が周辺で活動をしたものと考えられることから、具体的な内容は不明なもの、そうした一連の活動の痕跡として捉えておきたい。

奈良時代頃（III期）とした遺構は、掘立柱建物1と溝1のほかは時期を推定できる遺構は検出されていない。出土遺物は溝1の須恵器の壊片のみであり、時期の判断を含め不確定な要素が多いが、これまで墓域として土地利用されてきた当該地周辺が別の目的で使われるようになったと考えることができる。掘立柱建物1には、柱の規模は小さいものの底の可能性がある外周柱穴が四面に巡っており、当該地における活動の中心的建物であった可能性も考えられる。本遺跡は、遺跡範囲の東側は過去に大規模な削平を受けているためその広がりは不明であるが、今後、西側の公園敷地内において当該期における具体的な活動内容を検討できるような遺構・遺物が確認されることを期待したい。

今回調査地における土地利用の変遷をまとめると、古墳時代前期末頃に神納塚古墳が築造され、その後大きな時間差がなくI期とした土坑1において祭祀行為が行われ、しばらく後に、II期とした古墳時代後期において土坑2に代表される若干の活動痕跡が認められ、これらは日岡山古墳群の造墓活動に関連するものと考えられる。律令期になると、III期とした8世紀代に掘立柱建物を中心とする新たな土地利用が行われたものと考えられるが、今回の調査成果だけではその具体的な内容までは検討できない。この時期には、東側0.7kmに古代寺院である石守庵寺が造営されることから、そうした動きに関連している可能性もあり、周辺での調査事例の増加を待って改めて検討していきたい。

最後に、発掘調査と整理作業にご協力くださった多くの方々と、今回調査へ参加したすべての皆さまに心よりお礼申し上げます。また、今回の調査では発掘調査から報告書刊行に至るまで、森下章司氏から多くのご教示を賜りました。末筆ながら感謝の意を申し上げます。

引用・参考文献

- 青柳泰介 1995 「家形埴輪の製作技法について」『日本の美術 家形埴輪』第348号 至文堂
- 赤松啓介 1990 『古代聚落の形成と発展過程』明石書店
- 尼塚古墳発掘調査団・加古川市教育委員会 2012 『尼塚古墳』大手前大学史学研究所
- 石野博信・松下 勝 1969 『住居址 8』『播磨・東溝溝生遺跡II』加古川市教育委員会
- 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編 2011 『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 石見完次 1984 『村のすがた』『東播磨の民俗 加古郡石守村の生活誌』神戸新聞出版センター
- 上田哲也 1983 『岩山遺跡』『兵庫県大百科事典』下巻 神戸新聞出版センター
- 置田雅昭 1989 『米作りと金属器』『加古川市史』第1巻 加古川市
- 大野史誌編集委員会 2006 『大野史誌』加古川市加古川町大野町会
- 加古川市教育委員会 1992 『溝之口遺跡発掘調査報告書』加古川市文化財調査報告10
- 加古川市教育委員会 1997 『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市文化財調査報告15
- 加古川市教育委員会 2017 『人冢古墳』加古川市文化財調査報告25
- 加古川市誌編集委員会 1953 『加古川市誌』第1巻 加古川市
- 加西市教育委員会 1990 『玉丘古墳』加西市埋蔵文化財調査報告4
- 加西市教育委員会 2017 『玉丘古墳II』加西市埋蔵文化財調査報告76
- 加西市史編さん委員会 2010 『加西市史』第7巻 加西市
- 岸本一宏 2011 『F地区的調査』『坂元遺跡III』兵庫県文化財調査報告第404冊 兵庫県教育委員会
- 岸本道昭 2013 『古墳が語る播磨』神戸新聞総合出版センター
- 笹栗 拓 2017 『津堂遺跡における古墳時代中期の土器編年-古市古墳群周辺集落の土器様相とその特質-』『大阪文化財研究』第50号 公益財團法人大阪府文化財センター

- 斎栗 拓 2018「津堂遺跡の集落出現期の土器と周辺動向」『古墳出現期土器研究』第5号 古墳出現期土器研究会
- 羅宮 正 2006「山陽本線地区的遺跡の変遷」『溝之口遺跡』兵庫県文化財調査報告第309冊 兵庫県教育委員会
- 清喜裕二・横田真吾 2012「景行天皇皇后播磨稻日大命廟 日岡圓の埴輪外形調査」『書陵部紀要』第63号 宮内庁書陵部
- 高橋克壽 1996『歴史発掘⑨ 墳輪の世纪』講談社
- 田中真吾 1989「加古川市付近の地形と地質」『加古川市史』第1巻 加古川市
- 第17回播磨考古学研究集会実行委員会 2016『播磨の埴輪』
- 辻 美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学・大阪大学考古学研究室10周年記念論集』大阪大学考古学研究室・大阪大学考古学友の会
- 友久伸子 2018「美乃利遺跡の調査成果 弥生時代の土器」『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅳ・美乃利遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市文化財調査報告29 加古川市教育委員会
- 中川 渉編 2010『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第384冊 兵庫県教育委員会
- 西口圭介 2009「条理型地割の復元と集落の考察」『坂元遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第366冊 兵庫県教育委員会
- 西谷眞治 1989「豪族の誕生」『加古川市史』第1巻 加古川市
- 西谷眞治 1996「東車塚古墳」『加古川市史』第4巻 加古川市
- 埴輪検討会 2003『埴輪論叢』第4号
- 埴輪検討会 2003『埴輪論叢』第5号
- 兵庫県教育委員会 1998「白沢山古墳跡(白沢6号窯)」兵庫県文化財調査報告第175冊
- 兵庫「語りつごう戦争」展の会・兵庫歴史教育者協議会 2013『兵庫の平和史跡ガイド』日本機関紙出版センター
- 古屋紀之 2011「土器と土製品の古墳祭祀」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- 埋蔵文化財研究会 2003『埴輪 発表要旨集』第52回埋蔵文化財研究集会
- 松下 勝 1984「加古川流域の遺跡」『日本の古代遺跡3 兵庫南部』保育社
- 松本正臣・安川豊史・春成秀爾 1982「播磨南部採集の旧石器」『旧石器考古学』24 旧石器文化試話会
- 美乃利史誌編纂委員会 2021『美乃利の本』加古川市加古川町美乃利町内会
- 山田清耕 1997「地形環境の変化と土地利用の変化」『美乃利遺跡』兵庫県文化財調査報告第165冊 兵庫県教育委員会
- 山田清耕 2012「『望塚』について」『東沢1号墳』兵庫県文化財調査報告第431冊 兵庫県教育委員会
- 山本祐作 2017「古記録にみる日岡山古墳群②」『東播磨』第23号 東播磨地域史懇話会
- 横山浩一 2003「須恵器に見る車輪文明き目の起源」『古代技術史致』岩波書店
- 立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻編 2020「考察:近畿地域における古墳の渡り土手」『久津川車塚古墳2019年度発掘調査概報』
- 渡辺 昇 2009「おわりに」『坂元遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第366冊 兵庫県教育委員会

図 版



写真 18 遺跡上空から日岡山公園を望む（南東から）



写真 19 神納塚古墳と日岡山公園（北東から）

神納塚古墳

図版2

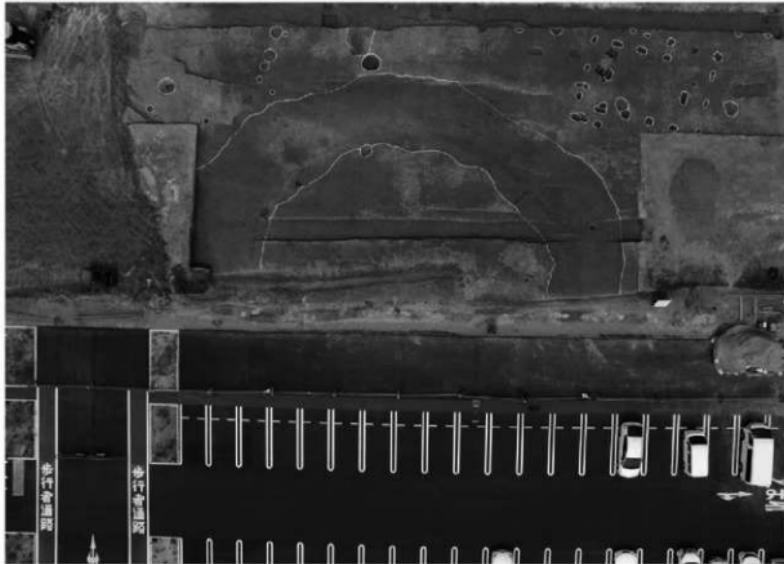


写真20 神納塚古墳（写真下が南東）



写真21 神納塚古墳（北東から）



写真 22 神納塚古墳 棚出（南西から）



写真 23 神納塚古墳（南西から）

神納塚古墳

図版 4



写真 24 神納塚古墳 遺物出土状況（南西から）



写真 25 神納塚古墳 遺物出土状況（北東から）



写真 26 神納塚古墳 A 区遺物
(南から)



写真 27 神納塚古墳 B 区遺物
(南東から)



写真 28 神納塚古墳 C 区遺物
(南から)

図版 6

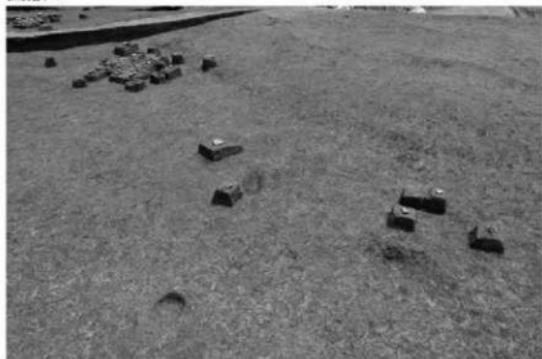


写真 29 神納塚古墳 D 区遺物
(南西から)



写真 30 神納塚古墳 E 区遺物
(北東から)



写真 31 神納塚古墳 F 区遺物
(南東から)



写真 32 神納塚古墳 土層(A-A')
(東から)



写真 33 神納塚古墳 土層(A'-A'')
(東から)



写真 34 神納塚古墳 土層(B-B')
(南から)

図版 8



写真 35 神納塚古墳 土層(C-C)
(南から)



写真 36 神納塚古墳 土層(D-D)
(西から)



写真 37 神納塚古墳
周濠断面検出（南から）



写真 38 広沢山遺跡 挖立柱建物 1 棚出（北から）



写真 39 広沢山遺跡 挖立柱建物 1（北東から）

図版 10

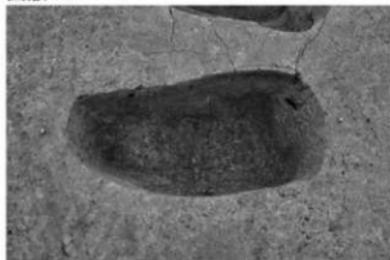


写真 40 広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P1 (西から)



写真 41 広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P1 断面 (西から)

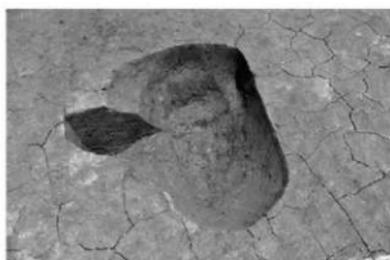


写真 42 広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P3 (南から)



写真 43 広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P3 断面 (南から)

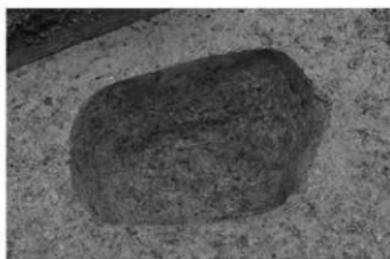


写真 44 広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P6 (西から)

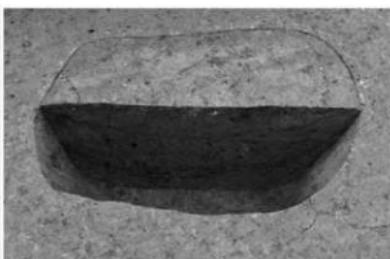


写真 45 広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P6 断面 (西から)



写真 46 広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P7 (南から)



写真 47 広沢山遺跡 掘立柱建物 1 P7 断面 (南から)



写真 48 広沢山遺跡 土坑 1(南西から)



写真 49 広沢山遺跡 土坑 1 遺物出土状況(南から)

広沢山遺跡

図版 12

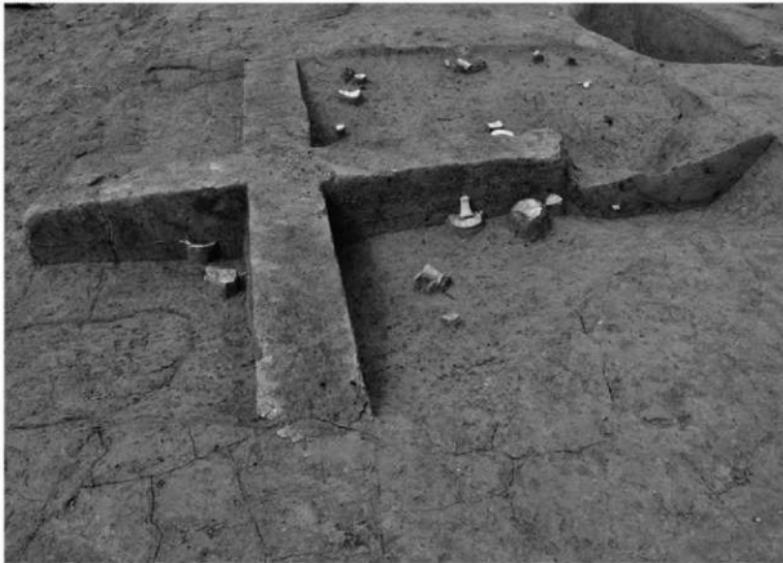


写真50 広沢山遺跡 土坑1 土層(A-A') (南西から)



写真51 広沢山遺跡 土坑1 土層(B-B') (西から)



写真 52 広沢山遺跡 土坑 2（北西から）



写真 53 広沢山遺跡 土坑 2 土層（西から）

広沢山遺跡

図版 14



写真 54 広沢山遺跡 土坑 3（南から）



写真 55 広沢山遺跡 土坑 3 土層（南西から）



写真 56 広沢山遺跡 溝 1 (西から)



写真 57 広沢山遺跡 溝 1 土層 (B-B') (南西から)

図版 16

広沢山遺跡



写真 58 基本層序 (A-A') (南西から)



写真 59 基本層序下層 (A-A') (北から)



写真 60 基本層序 (B'-B'') (南西から)



写真 61 基本層序下層 (B'-B'') (西から)



写真 62 作業風景①



写真 63 作業風景②



写真 64 作業風景③



写真 65 作業風景④

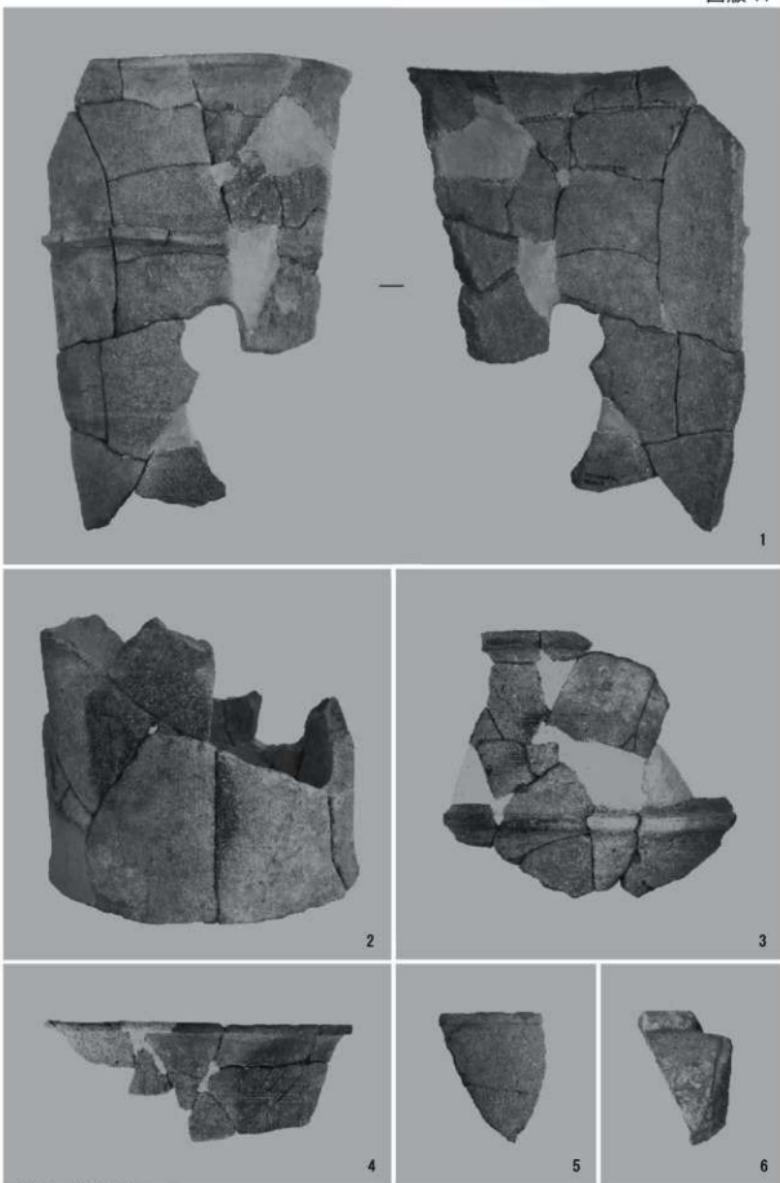


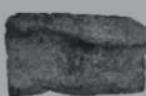
写真 66 実測遺物 1 ~ 6

図版 18

神納塚古墳



7



8



9



—



10



11



14



12



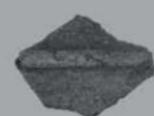
16



13



15



17

写真 67 実測遺物 7 ~ 17

図版 19

神納塚古墳

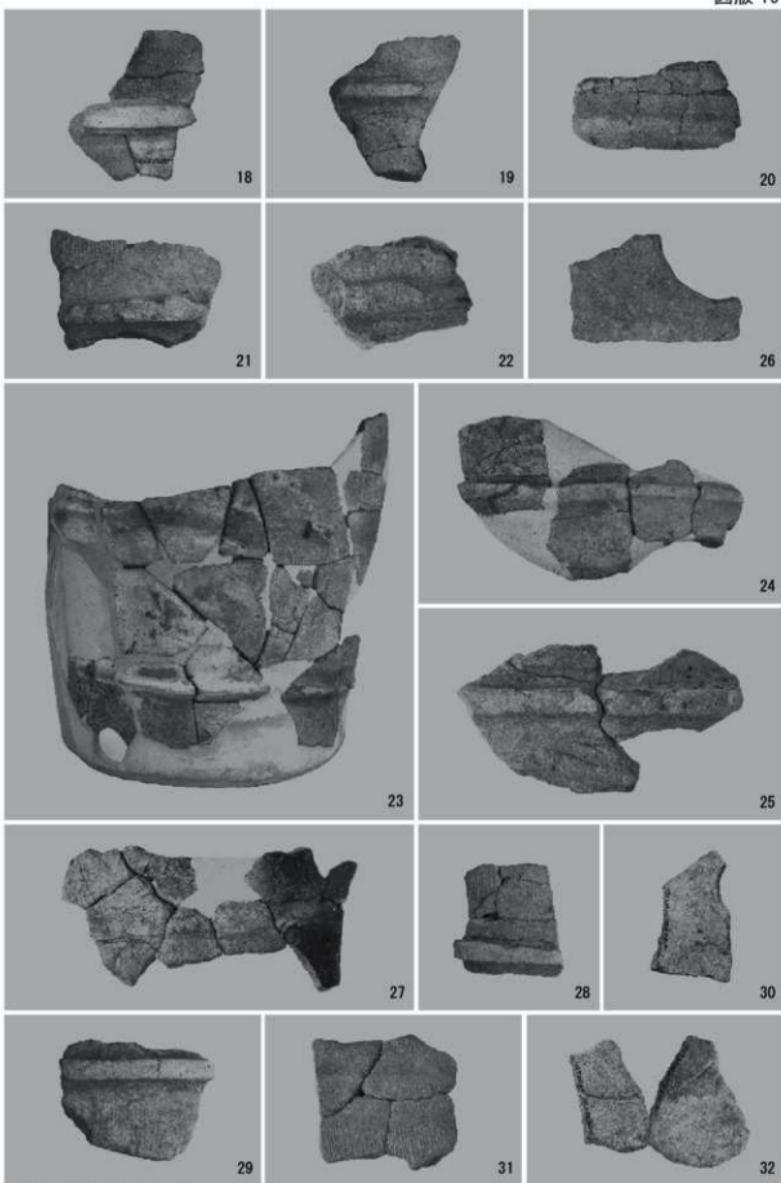


写真 68 実測遺物 18 ~ 32

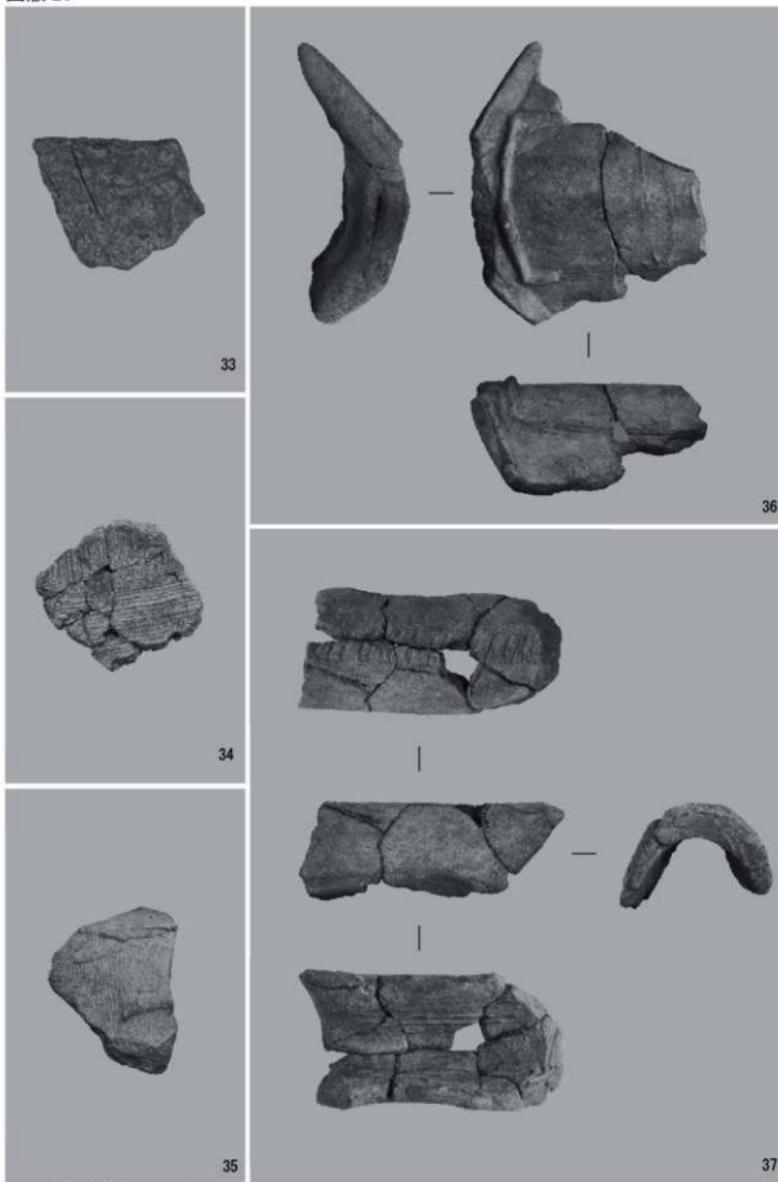


写真 69 実測造物 33 ~ 37

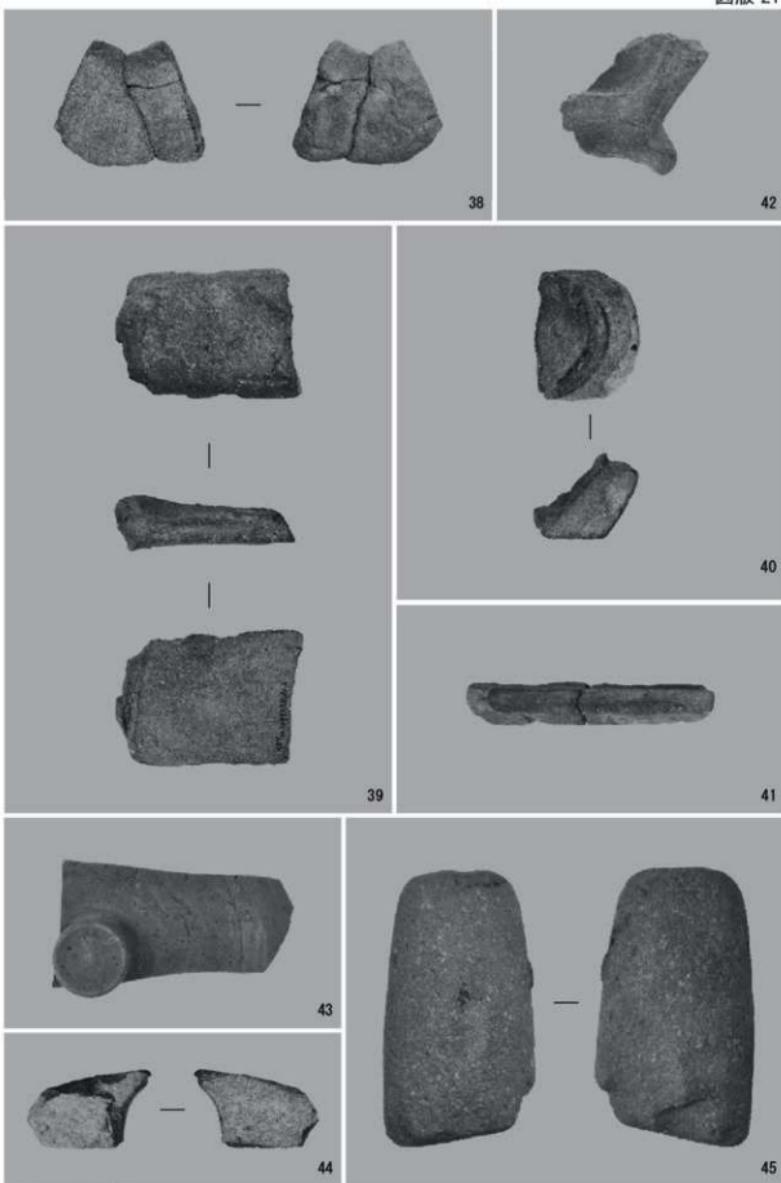


写真 70 実測遺物 38 ~ 45

図版 22

広沢山遺跡

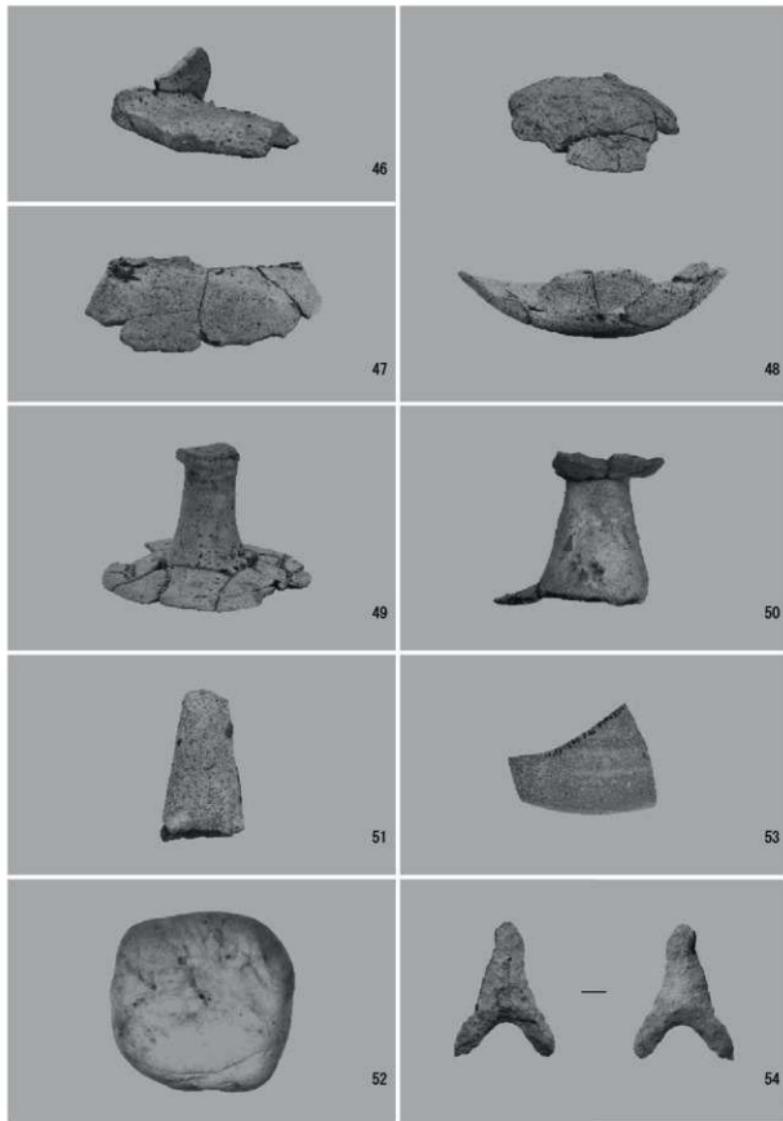


写真 71 実測遺物 46 ~ 54

報告書抄録

加古川市文化財調査報告 35

神納塚古墳発掘調査報告書・
広沢山遺跡発掘調査報告書

令和4（2022）年1月31日

編集・発行 加古川市教育委員会

〒 675-0101 兵庫県加古川市平岡町新在家 1224-7
TEL 079-423-4088

印 刷 小野高速印刷株式会社

〒 670-0933 兵庫県姫路市平野町 62
TEL 079-281-0008